

# 木 林 里 川 海 大 好 き !

「森里川海大好き！」編集委員会

木  
林  
里  
川  
海  
大  
好  
き  
!

「森里川海大好き！」編集委員会



環境省

つなげよう、  
支えよう  
木  
林  
里  
川  
海

# 木里川海大好き!

『森里川海大好き!』編集委員会



## 自然に親しむ ― 私たちは森里川海でできている―

この本は、子どもたちに自然に親んでもらいたいと強く願っている人たちが作ったものです。だからこの本を読んだら、次は外に出て、自然に親んでくださいね。

自然って、もちろん森や里や川や海です。そういうところに行く、遊ぶ。そうすると気持ちがいい。雨が降ったらどうする。雪だったらどうだ。そういうこともありますね。でも天気の良い日だってあるでしょ。

森、里、川、海に行くのもいいけれど、マンガを読んで、ゲームがやりたい。それもいいですね。今は八十歳の私でも、両方やります。でも森や里や川や海にも行きます。なぜって、虫がいるからです。私は、虫とりが大好きなんです。嫌いな虫もありますよ。虫じゃなくて、魚を釣ってもいい。カニを捕まえてもいい。小学生の頃は、どちらも大好きでした。今は虫です。川でも海岸でも、もちろん虫とりはできます。

この本には、水の流れが出てきます。森に降った雨は、地面の中や川を流れて、やがて海に入ります。でもまた雨になって森へ落ちてきます。ぐるぐる回っているんですね。

君たちの体も、七割は水なんです。その水は飲んだ水ですね。食べ物にも水がたくさん含まれています。その水はどこから来たんでしょう。飲む水は水道からです。水道の水は、川やダムから来ます。

ダムは川をせき止めて作られています。だから結局は、川の水ですね。そう、君たちの体の水は、川から来たわけです。それなら、川は君たちの体につながっていますよね。

田んぼがあります。「あれは田舎にあるもので、自分と関係ない」。農家の子でないと、そう思うかもしれません。でも君たちはお米を食べるでしょ。食べたお米は身体を動かすエネルギーになります。車のガソリンみたいなものです。でも君たちの体も作ります。つまり、米が君たちの体の一部になるわけ。それなら田んぼは、将来の君たちの一部じゃないですか。そう思ったことがありますか。

魚を食べる。食べた魚の一部は君たちの体になります。魚は海の中で育ちます。それなら君たちは海を食べてるみたいなので、さらにそれなら、海も君たちじゃないの。

海は海、川は川、自分とは違うよ。ふつうはそう思います。でもよく考えてみると、海や川や森も、結局は自分につながっているのです。いま自分の体を流れている血は、あっちの川やこっちの川から来た水ですからね。

自然に親しんでいないと、なかなかそうは思えないのです。森や川は自分じゃない。そう思ってしまいます。そうすると、森や川にゴミを捨てても平気になります。「自分と関係ない」と思うからでしょうね。

世界と君たちはしっぴかりつながっています。自然に親しんで、それを感じられるようになってください。心からそう願っています。

自然に親しむ ― 私たちは森里川海でできている ―…………… 2

**大発見は足もとに**…………… 7

1 おばけ池の少年…………… 8

物語に登場する生き物たち ①…………… 18

2 君はどうしたい？…………… 23

物語に登場する生き物たち ②…………… 38

3 トンネルを抜けたら…………… 40

4 一匹びきでは生きられない…………… 54

5 大ウナギを釣つるのだ…………… 69

健康な「森と里と川と海」は、そしてそれらの  
つながりは、なぜ私たちにとって大切なのか？…………… 86

**先生たちから子どもたちへ** ― コラム 森・里・川・海…………… 95

コラム 森 日本は「森林（もり）の国」…………… 96

コラム 里 伝説の巨人きょじん「ダイダラボッチ」と里山の子どもの暮らし…………… 98

コラム 川 日本にはたくさんくの川がある…………… 100

コラム 海 陸に上がった魚は、今…………… 102

コラム 体験 自然体験は、どうして子どもに必要なのか？…………… 106

コラム 生き物 ウナギとザリガニが教えてくれること…………… 108

大人の皆さんへ かわいい子には体験を！ ― 子どもの頃の体験は人生の基盤 ―…………… 112

大人の皆さまにお伝えしたいこと…………… 116

『森里川海大好き！』編集委員会…………… 118



大発見は足もとに

## 1 おばけ池の少年

「みどりが丘団地のおばけ池には、夜な夜なおばけが出るらしい」  
そんなうわさが学校に広まったのは、六月に入ってからだった。

「おばけ池におばけが出るのは当たり前だろ、おばけ池にライオンが出たらおどろけ」と、先生は冗談まじりにいったが、僕たちは見たこともないおばけの話題で盛り上がった。

誰かがいった。

「何でもさ、おばけの正体は小学生の男子らしいぜ。おばけ池のほとりに一人でぼつんと立っていてさ、そのままふっと消えてしまうというんだ」

「だってあそこは、立ち入り禁止だろ。フェンスがあつて、入れないじゃん」

「どっちも、おばけにや、関係ないことだ」

「そうか、でも、タクミ、くわしいんだな」

「ああ、隣のおじさんから聞いたんだ」

おばけが出るのは子どもが歩かない夜中のこと。目撃者は、たいてい仕事帰りの大人だった。おばけを見たという人は数人いるらしいが、大人はこうした話を面白がることはなく、子どもが大げさに、より面白い話にして、うわさを広めているのだった。

「そうだ。今度、夜中にみんなでおばけ探しにいかないか？」

「えー、やだよ」

「こわいのか、いくじなし」

「違うよ。塾はあるし、スイミングはあるし、そんなにひまじゃあないってこと」

「ま、みんな忙しいからな」

何だかんだといいながら、みんなはおばけの話で盛り上がっていた。しかし、僕は、冷めていた。

はつきりいって、おばけなどこの世にいるはずがない。それに、おばけ池は僕の家目の前にあるのだ。毎日、勉強部屋から見ている池にそんなものがあるはずがないことは、僕が一番知っている。

それ以前に、僕は、おばけの正体にうすうす気がついていっているのだ。

（ユウヤに違いない。ユウヤの家はおばけ池のすぐ近くだし、あいつは大人しくせに、フェンスを乗り越えることなど、平気な男だ）

幼なじみだから、僕には分かるのだ。

みんなが気づかないのは、ユウヤが四月から不登校になったからだと思う。みんなは、教室に来なくなってしまうユウヤのことを、すっかり忘れてしまったようだった。

「おばけの写真とか撮ったら、テレビ局が来るかなあ」

「こわくて撮りにいけないくせに」

僕は、ノリの悪いやつと思われぬ程度にタクミたちの話に相づちを打ち、適当に話を聞いていた。

七月の蒸し暑い夜だった。晩ごはんを食べながらお母さんがいった。

「ヒロキ、おばけのうわさ知ってる？ いやよねえ、家の前で変なうわさが立って」  
僕は大人ぶって答えた。

「うわさなんてのは、すぐに消えるよ」  
するとお父さんが、興味津々の顔で近づいてきた。

「何、何、何？ おばけが出るって？」

「つまらないうわさだよ」

「何だよお、つまらないなんていうなよお」

子どものような声を出す父に、僕は、きっぱりといった。

「つまらないからつまらないの。おばけなんているわけがないだろ」

「まあまあ、そうやって、決めつけるなよ」

「まさか、いるか思ってる？」

「うん。だって、面白いじゃん、おばけが出るなんて。ヒロキは見てみたいと思わないのか？」

「……」

僕は、父のこういうところがきらいだった。こうした話を小さな子どものように面白がらないと、すぐにつまらないという顔をする。そんな顔をされたら、まるで僕自身が面白くない人間だといわれているようにじゃないか。僕はもう六年生、来年は中学生なのだ。いつまでも小さな子どもみたいなことはいつ

ていられない。

「なあ、父さん」

「何だ？」

「おばけ池って、昔からあるのか？」

「ああ、あるよ。子どものころは、よく遊んだな」

「何して？」

「そりゃ、魚捕りさ。メダカやドジョウ、フナやモロコもいたなあ。あの池からは、細い小川が流れていて、もっぱらそちの川で遊んだなあ」

「メダカとか、まだいるかな？」

「うーん、もういないだろうなあ。ヒロキはどう思う？」

「絶滅危惧種だっていうし、いるわけないっしょ」

「難しいこと知ってるな」

「常識！」

「そうだ。それよりさ、俺が子どものころやったスイカやトマトの盗み方を教えてやろうか。いいか、もいでもそのまま持っていくと見つかるから、いったん小川に流すんだよ。で、知らん顔して下流で待つと、プカプカ流れてくるんだ。そいつを拾って食うわけだ。こうすれば見つかっても、盗んだんじゃない、拾ったんだって、いいわけできるだろ。どう、ためになるだろ」

「役に立たない話」

「役に立てるかどうかは、お前次第だ」

「お父さん！」

くだらない父の話は、目をつり上げた母の一言でと絶えた。僕は夫婦げんかのまき添えを食うのはいやなので、そのまま二階にある自分の部屋へと向かった。

部屋に入るとまず、窓からおばけ池を見下ろした。おばけ池は団地の坂を下りきったところにあつた。池と坂道との間には草や木が生い茂り、その周りを金網のフェンスが取り囲んでいる。高学年なら乗り越えることができる高さだが、乗り越えて草むらに入るもの好きな子どもなど、どこにもいなかった。池の対岸は斜面が急なスロープで、二十メートルもある斜面はコンクリートで固められていた。階段もあるにはあるのだが、やはり、ガードレールと高いフェンスで囲まれているので、誰も池に近寄ることなどできなかった。

（ほら、おばけなんかいない）

僕は池を確かめると、マンガの本を手にベッドに横になった。僕にはマンガを読むかゲームをする以外、楽しみはなかった。壁にかけてあるルアーロッドも、友だちとのつきあいで買っただけで、特別、釣りが好きというわけではなかった。

一時間もしただろうか。階段の下からお母さんの声がした。

「ヒロキ、もう九時だから、早くお風呂に入りなさい」

「はい」と、僕は立ち上がった。しかし、窓から見えるおばけ池を見て、体が固まった。

池のほとりに、おばけが立っていたからだ。何人もの大人が目撃したという少年に間違いない。少年は白いシャツを着て、身じろぎもせずす暗い藪を見上げていた。

（ユウヤだ！）

僕は、懐中電灯を手にとると、こっそりと玄関を抜けだした。

おぼろな月が空にとどまり、団地全体をぼんやり照らしていた。僕は、足音を立てずに長い坂を駆け下りた。街灯に照らされアスファルトが白く光っていた。その分、僕の影は地上にはつきりと映り、街灯を過ぎるたび、伸びたり縮んだりを、何度も繰り返した。坂を下りきると、僕は何食わぬ顔で自動販売機の前に立った。もちろん、人に怪しまれないためだ。白いワゴン車が目の前を横ぎっていった。

（よし、今だ）

僕は、すばやくフェンスを乗り越えると、静かに着地をした。そして、背丈ほどもある草をかき分け、木の陰からおばけをのぞいた。

（やっばり…）

おばけの正体は、予想通りユウヤだった。

ユウヤと僕とは、ずっと仲良しだった。遊ばなくなつたのは、四年生のころ。みんなが、塾やサッカーで忙しくなり始めたころからだ。同級生のほとんどがひまな時間はゲームで過ごすという中で、ユ



ウヤだけが浮いていた。ウウヤはゲームもしないのだ。せめて、話ぐらい合わせればいいものを、ウウヤはそれもしなかった。

要するに、空気が読めないのだ。

だから、いつも一人ぼっちで校庭の片隅かたすみにいることになる。そんなウウヤが、春から学校に来なくなつた。先生は、当たり前前のように「ちよつとした不登校だから」といった。しかし、みんなの態度たいどは冷たかつた。

「いてもいなくても変わらないよね」

「要するに、ずる休みでしょ」

僕ぼくも、そんな彼かれらと同じく、ウウヤに関わることはしなかった。

そんなウウヤがここにいた。僕は（学校にも来ないやつが、夜のため池で遊んでいていいのか）というところを、問い詰めてやろうと思つていた。

ウウヤは小さな懐中電灯かいちゆうとうで藪やぶを照らしながら、僕の方へ近づいてきた。隠れようと思つたが、これ以上身を隠す場所はない。

（やばい！）

とっさに逃げにだそうとする僕に、ウウヤがいった。

「だめ、動かないで！」

「……」

「その木を見て……」

ウウヤの視線しぜんを追うと、僕が手をかけていた木にでっかいスズメバチがとまっていた。刺さされるかもしれないと、僕の頭はパニックになった。しかし、足がすくんで一歩も動けない。

「いいから、いいから。そのままゆつくりと、こつちへ来て」

「……」

「そう、ゆつくりとだよ」

僕は、さびついたロボットののような動きで、スズメバチのいる藪やぶから脱出だつしゅつした。ウウヤが、スズメバチをのぞきこみながらいった。

「ハチはさ、巣を守るとき以外、むやみに攻撃こうげきなどしてこないんだよ。だからおどろかさなければ、大丈夫じやうぶ」

「本当か？」

ウウヤは、僕に見つかったことなど気にもせず、食い入るようにスズメバチをながめていた。

「へー、キイロスズメバチだ。よく見ると、ハチってかっこいいよね。機能きのう美うつていうのかなあ、すごいデザインだ」

「意味不明だし」

「どこかに巣があるんだろうなあ。そうそう、スズメバチはさあ、巣もマーブル模様もようでキレイなんだ」  
「かっこいいとかキレイとか、お前まへ絶対ぜったいおかしいよ。だってこいつは超危険生物ちやうきけんせいぶつだぜ。テレビでもやっ

てるだろ、最近、スズメバチが住宅地に侵入してきたって」

「あはははっ、それは違うよ。人間がスズメバチのすみかに侵入してんの」

何だか調子がくるった。ユウヤはご機嫌でよくしゃべる。僕に見つかった後ろめたさとかないのか？ 押されぎみの僕は、形勢を逆転しようと、こういった。

「ところでお前、こんな場所で何してんだよ。ここは立ち入り禁止だし、子どもの出歩く時間じゃないだろ」

「へへへっ」

「何がおかしい？」

「それは、ヒロキも同じだろ。そんなことより、そこ見てよ」

ユウヤはそういうと、再びスズメバチのいた木を指差した。

「あつ、ノコギリクワガタ」

僕の胸は高鳴った。クワガタもカブトムシも、ペットショップで買うものだと思っていたからだ。低学年のころ、虫採りに出かけたことはあるが、実際につかまえたことは一度もない。

「採ってごらんよ」

「いいのか？」

「うん」

僕は緊張する指先で、ノコギリクワガタをつまんだ。

「かっこいいでしょ」

「まあな…」

平静を装ったが、指先が震えていた。感動すると本当に手足というものは震えるのだ。

「これは柳の木なんだけどさ、樹液が出ているからいろいろいるよ。団地のど真ん中だし、フェンスで囲まれているから誰も知らないみたい。せっかくだから、もっと、探そう」

そして僕はユウヤを問い詰めることも忘れて、クワガタ探しに夢中になった。おぼけ池の脇にある藪には、数本の木が並んでいた。僕はその一つ一つを懐中電灯で照らし、クワガタを探した。樹液の出ている場所では、数匹のカナブンが蜜を吸っていた。

「茶色ののと、緑色のがいるんだな。こっちは蛾か？」

「それは地味だけど、蝶だよ。ヒカゲチョウ」

「えー、これで蝶なのか？ 地味だぜ」

「止まるとき、翅を閉じるのがチョウ。翅を開いて止まるのがガ」

「へー、そうなの」

「ま、大体だけだね」

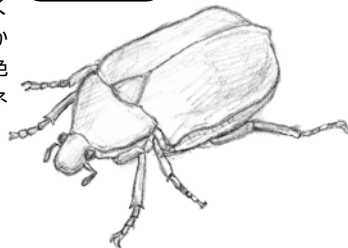
「おおっ、カブトムシだ。マジすげー」

樹液に虫が集まる様子など、テレビでしか見たことがなかった。

(すごい、夜って、こんなに虫がいるんだ…)

日本では本州以南から屋久島にかけて生息  
すると考えられている。コガネムシとよく  
似ているが、コガネムシが金属的な鮮やか  
な緑色であるのに対し、カナブンは赤茶色  
をおびた色である場合が多い。体もコガネ  
ムシより大きいことが多い。

**カナブン**



**キロスズメバチ**

ハチの中で最も攻撃的な  
のがスズメバチの仲間。都  
市部の家屋にも巣を作るた  
め、もし巣を見つけても絶  
対に近寄らないように。

**ヒカゲチョウ**

本州と四国と九州の一部に生息  
する日本固有種の蝶で、色は地  
味。花の蜜よりも樹液や果実を  
好むため、樹液についていると  
ころを見つけることが多い。



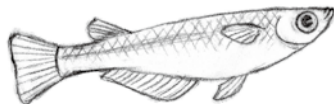
**タニシ**

日本には4種のタニシが知られている。  
全国の小川や用水路等の淡水に広く生  
息するが、環境の悪化により個体数の  
減少が心配されている種 (マルタニシ)  
もある。殻は全ての種で右巻きで、そ  
の特徴がタニシ以外の巻貝との区別に  
用いられることもある。



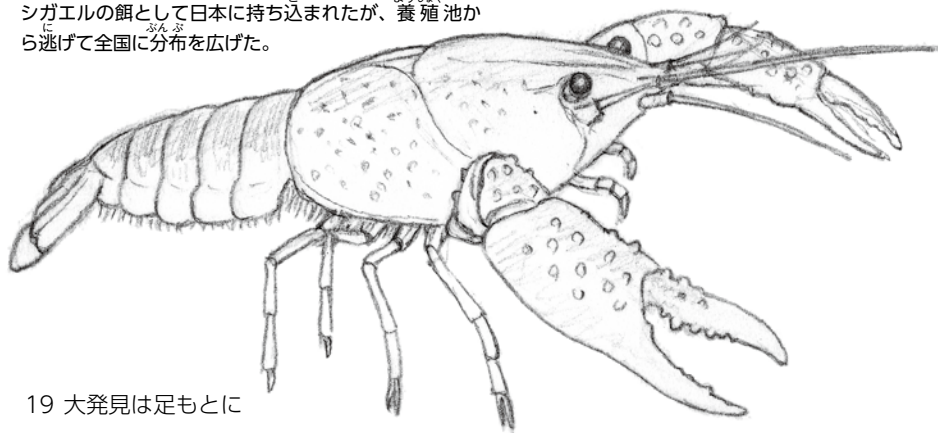
**メダカ**

田んぼや小川、池や沼などの淡水域に広く生息す  
る。群れて生活する姿が「メダカの学校」として  
歌われ親しまれてきたが、今は絶滅危惧種。



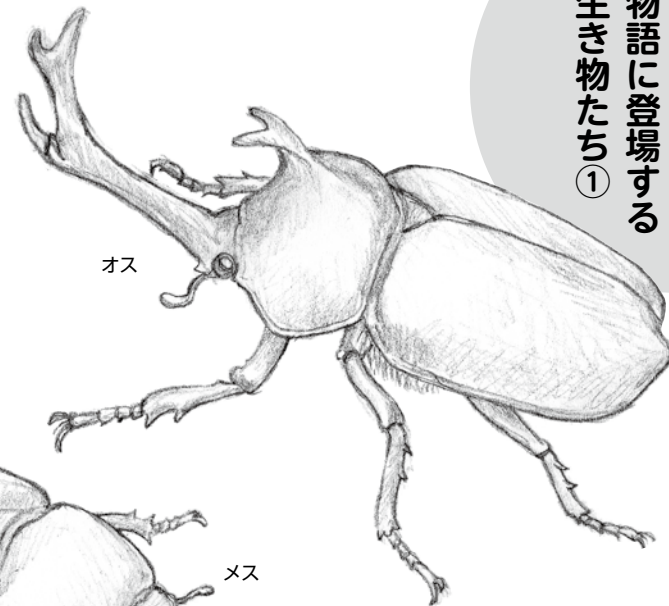
**アメリカザリガニ**

その名の通りアメリカ南部が原産。1927年に食用のウ  
シガエルの餌として日本に持ち込まれたが、養殖池か  
ら逃げた後に全国に分布を広げた。



**カブトムシ**

日本の甲虫で最も大きく、  
本州から南の雑木林など  
に生息する。ただし、北海  
道では、人が放したものが  
繁殖したと考えられている  
場所もある。主に夜、クヌ  
ギなどの樹液が染み出る  
場所に、クワガタやスズメ  
バチなどととも集まる。



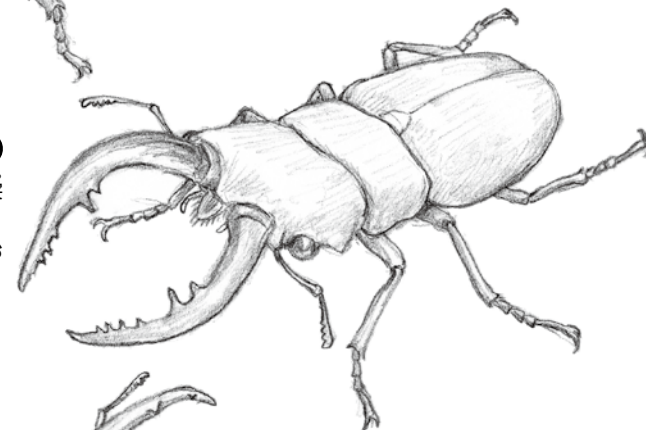
オス



メス

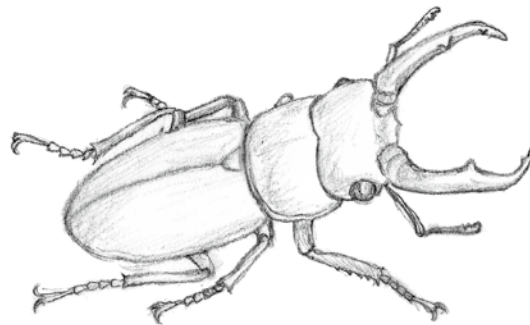
**ノコギリクワガタ**

大きな顎にノコギリのような突  
起が多数あることからノコギリ  
クワガタと呼ばれる。赤みをお  
びた体と湾曲した顎が特徴。



**コクワガタ**

日本のクワガタムシの中で最  
もふつうに見られ、森林だけ  
でなく町の街路樹や公園の樹  
木でも見つけることがある。



僕は興奮した。ユウヤを問い詰めにきたのに、そのことも忘れ、二人で虫を探した。結局、その後、見つけたのはコクワガタ一匹だったが、ノコギリクワガタにカブトムシ、初めての体験に僕の胸は高鳴った。

おぼけ池の脇に僕たちは座り、真つ暗な池をながめていた。フェンスの向こうから、街灯や家の明かりが僕たちを取り囲んでいる。何だか、このおぼけ池だけが、別の世界のように思えた。

「あれ、ヒロキの部屋でしょ」

「うん。お前の部屋はあれだろ」

低学年のころは、一緒に遊んでいた仲だった。

「考えてみれば、池をはさんだ隣同士だね」

そんな風に考えたことはなかった。僕はこのタイミングで、ユウヤにいろいろ聞こうと思った。

「なあ、ここへはよく来るのか？」

「うん、ときどきね」

「でも、何で夜なんだよ。虫が多いからか？」

「ううん。それはさ…、礼儀かな。学校へ行かず、昼間からうろろしてたら、見つけた大人が困るだろ。ヒロキだって、自分が学校に行つてるとき、僕が外で遊んでたら、いい気持ちがないだろ。不登校にも礼儀はあるんだ」

真顔でいうので、笑えた。

「さっきのスズメバチだって、黄色と黒のストライプだっただろ。あれは注意色。工事現場のトラ柵と一緒にだよ。俺は毒針をもっているからこわいぞ、近寄るなって、教えてくれているんだ。そうやって考えるとハチは、礼儀正しい親切な虫だろ」

なるほどなあと思った。

確かに、ユウヤは小さなころから礼儀正しく親切な男だった。ユウヤが学校で一人ぼっちだったのも、空気を読んでみんなに合わせないだけで、何ひとつ悪いことをしたわけじゃない。

「虫、好きなんだな」

「もともと、そんなに好きだったわけじゃないよ。ただ、夜の散歩でここへ来るようになってからかな。いろんな生き物を見つけると、何だか知りたくなるじゃん。そいつのこと」

「いろんな生き物って、虫だろ？」

「虫だけじゃないよ。ここには鳥が来るだろ、それからイタチとかハクビシンとか。カエルにイモリに

…、池の中にもいろいろいる」

「えー、この池、生き物いるの？」

「アミを入れたことはないから、よく知らないけど」

「魚は？」

「メダカはいるよ。あとは…、よく分からない」

「うそ、メダカがいるのか？」

僕は立ち上がり、懐中電灯で暗い水面を照らしてみた。すると、水面を泳ぐ小さな魚がおどろいて、草陰に隠れるのが見えた。

「ほら、今のメダカだよ」

「マジかよ…」

ついさつき、父と絶滅危惧種だからいないと話をしたばかりのメダカが、何匹もいた。水面にはアメンボウがつんつんと浮かび、その下をけし粒のような甲虫が横ぎった。

「あっ…」

ユウヤが叫んだ。

「何だ？」

「ほら、そこ。石の上で目が光ってる」

僕はユウヤに寄り添うように、懐中電灯が照らす水中をのぞきこんだ。するとそこには、オレンジ色に光る目玉が二つあった。

「ザリガニか？」

「違う、エビだよエビ。本で見たことはあったけど、実物は初めてだ。て、いうか、こんなところにいるなんて」

ユウヤの声を聞きながら、僕も同じことを思っていた。

(僕たちが、知らなかったただけなのだ)

「ねえ、ヒロキ。しきり直そうよ。アミを持って、また明日、ここに来よう」

ユウヤは、満面の笑みで、そういった。

僕は返事をしなかったが、心は大きく揺れていた。そして僕たちは、このことは誰にも話さないと約束し、別々の道で、お互いの家に帰った。

## 2 君はどうしたい？

給食の後、みんなはいつものように教室の隅に固まり、たあいもない話をしていった。僕は、それとなく話の輪に加わった。するとみんなが僕の顔をのぞきこんでいった。

「すごいぞ、ヒロキ、最新情報だ。例のおぼけ池の件なだけどき、正体が分かったんだ」

僕の胸は、ドクンツと音を立てた。

(まさか、こんなに早くユウヤのことがばれるとは…、ひょっとして、昨日、二人でいるところを誰かに見られたのか?)

みんなの視線がこわかった。

「あれはさ、池に落ちて死んだ子どもの霊らしい。団地ができるずっと前に、魚捕りをしていてあの池

に落ちた子がいるんだってさ」

ほっとした。どうやら、僕たちのことは、ばれてはいないようだ。「えっ、あの池って、団地ができる前からあったのか？」

「ああ、昔はこのへん、山と畑ばかりだったらしいからな。農業用のため池っていうやつ、分かるだろ？ その名残さ」

「でもさ、魚捕りって、魚なんているのかよ」

「昔はいたらしいぜ。フナとかメダカとか」

「今は？」

「いるわけねーし。団地の池だけ、フェンスがあつて入ることもできねーし」

「だよなー」

何だか悔しかった。みんなに、ノコギリクワガタがいたことも、カブトムシがいたことも、メダカがいたことも、エビがいたことも、全部教えてやりたかった。でも、それはユウヤとの約束だからできない。僕は何もいわず、秘密の味をかみしめながら、自分の席へと戻った。

その日は、夕飯の後すぐに風呂に入り、コンビニに行くといつて家を出た。アミとバケツは、あらかじめ車庫に用意しておいたので、それを持って坂を下った。フェンスを乗り越えると、ユウヤが木の前で待っていた。

「待ってたよ」

「えっ、昨日は来るとはいわなかったぜ」

「でも、来ると思ってた」

何だか、見透かされたみたいで悔しかった。しかし、昨日の時点で、ここに来ることを僕は決めていた。「いいから、早く捕ろうぜ。あんまり遅くなれないし」

僕は、そうごまかして池に向かった。

まずは柳の木の近くから。この辺は浅く、水辺に草が生えていた。ユウヤは手をいっぱい伸ばし、遠くから手前に引くようにアミを動かした。見たことないやり方だ。

「アミって、すくい上げるもんじゃね？」

「手前からすくおうとすると、魚は向こうに逃げちゃうから、これが正解だよ。池の底を感じながら、ゆっくり引き寄せるんだ」

ザバンツ。

ユウヤが、引き寄せたアミを引き上げた。

「あっ、すごい」

「どう、何が捕れた？」

アミの中には、数匹の小魚と、よく分からない虫が入っていた。

「やった。これ、メダカだよ。これは、フナの赤ちゃんかな。あとは、ヤゴが二種類。ギンヤンマとサナエトンボかな？」

僕には名前など分からないが、とりあえず自分でつかまえてみたかった。ユウヤを真似て、アミを遠くにザブッとやった。

アミに伝わる水の抵抗。少しずつ引き寄せると、池の底に石があることや、泥があることが感じられた。そして、アミを返すと、そこには真つ赤な獲物がいた。

「おっ、アメリカザリガニだ」

「やったね、ヒロキ」

それから僕たちは、夢中でアミを動かし続けた。何度も何度も、アミを入れては引き寄せる。獲物がいなければ、すぐに飽きるのだろうが、いくらでも獲物が捕れるからやめられない。

「魚捕りつて、意外と簡単なんだな」

「この池が、すごいんだよ」

僕たちはそういつて笑った。他にも分かっていたことがある。この池が思ったよりも、深くないということだ。特に柳のある東側は浅く、土のスロープになっていた。ここには草が生え、小魚や虫が多かった。それ以外の岸はコンクリートで固められ、いきなり深くなっていたが、それでも水深は五十センチほどで、立ってない深さではなかった。ここにも魚がたくさんいたが、アミを入れると、さっと逃げてしまうので、ほとんど捕ることはできなかった。一番の発見は、池の周りが古い石組みでできていたことだ。小さなころから見えてきた池なのに、フェンスの外からは気がつかなかった。

「分かった。これは、昔のため池の石組みだ。おそらく団地ができたとき、ため池の周りをコンクリートで覆ったんだな。だから、きつと、この池の魚は、ずっと昔からすんでいるやつらなんだよ」

ユウヤが興奮気味にいった言葉は、正解だと思った。そしてもう一つの発見は、この池に出口があったということだ。池の西側には、けっこう広いトンネルがあった。トンネルの入り口には幅一メートルほどの堰があり、雨で増水したときにあふれた水がトンネル内の水路に流れでるといしくみになっている。水路の脇は、歩けるようになっていたが、真つ暗なので入る気にはなれなかった。

「ユウヤ、こんなトンネル、知ってた？」

「僕の家からは、見えるからね。道路からは見えないと思う」

「でもさ、不思議じゃね？ 雨も降ってないのに、けっこうな水が流れてるぜ」

僕の質問に、ユウヤは迷わず答えた。

「たぶん、湧き水だと思う。あの斜面から染みでた水が池に入るんだよ。それが証拠に、あそここのコンクリート、ぬれているだろう」

確かに、池の北側のコンクリートはいつもぬれ、コケがいっぱい生えていた。それにしてもユウヤは、何でこんなことが分かるんだろう。

「お前、何でも分かっちゃうんだな」

「想像だよ。正解かどうかは分からないけどね。でも、この水量は多すぎる。もしかして、ため池の中にも湧き水があるのかもしれない」

何だか、ユウヤと出会ってからはおどろきっぱなしだ。今まで見えていなかったものが、見えるようになったり、使ったことのない脳味噌でいろいろ考えているような気がする。

それから僕たちは、バケツの生き物を比べあった。

メダカ、フナ、モツゴ、ヨシノボリ、ドジョウ、ヤゴ、ザリガニ、エビ、オタマジャクシ。名前は、全部ユウヤが教えてくれた。

「ユウヤ、この獲物、どうする？」

「僕は、少しだけ持って帰ろうかな」

「えっ、水槽とかあるの？」

「うん。ヒロキは？」

「オレは無理。こんなの持って帰ったら、母さんに叱られちゃうよ。『夜なのに、どこ行ってたのー！』ってね。あつ、そろそろ時間だ。帰らなきゃ」

ユウヤが持って帰る魚を選んでいる間、僕はもう少し魚を捕ることにした。足もとの石垣を懐中電灯で照らし、水中をのぞきながら歩いた。石にはヨシノボリがぺたりとついていた。こいつはお腹のヒレが吸盤になっているんだと、さつき、ユウヤに聞いたところだ。ヨシノボリは、つんつんと泳いで石の壁に止まった。その脇にエビがいた。エビは光を当てると、まぶしそうに後ずさった。光がきらいなんだろうか。しつこく照らすと、石垣のすきまに入りこみ、出てこなくなった。アミでつかまえないでも、こうした生き物の動きを見ているだけで、飽きることはなかった。

しばらく行くと、柳の手前の浅瀬でタニシを見つけた。黒くて大きな殻を背負い、カタツムリのように、のったりと水の底を歩いている。池の底にはタニシの歩いた跡が、道のように残っていた。

(よし、つかまえてやろう)

ぬれた石に足を置き、懐中電灯で照らしながら、アミを伸ばしたときだった。水中を大きな影が横ぎった。

「うわあ！」

おどろいた僕は、足をすべらし、そのまま浅瀬にしりもちをついた。

ジャバーン。

「あわわわっ」

必死で池からはいだした僕のところへ、ユウヤが血相を変えて駆け寄ってきた。

「どうした、大丈夫か」

「へび、へび、へびがいた！」

「へび？」

「池の中に…、真っ黒で、こんなでかいやつ」

僕は動揺していた。この目で水中を泳ぐ巨大な生き物を見たのだ。腕ほどの太さがある、黒くて、とても長い影。

「水中？へびは水に浮くはずだけど…」



「見たんだよ、本当に」

「信じる、信じるよ。でも、何なんだろうなあ」

ユウヤが信じるといってくれたので、僕は落ち着きを取りもどした。しかし、冷静になったとたん、大問題に気がついた。全身ずぶぬれ、ズボンは泥だらけ。この格好で家に帰ったら、『何してたの、どこに行ってたの』という、母さんの質問攻撃を避けることはできない。

「どうしよう…」

困り果てた僕に、ユウヤがいった。

「大丈夫、とりあえず僕の家においでよ。作戦がある」

僕たちは、おばけ池の北の斜面にあるコンクリートの階段を登って、ユウヤの家に向かった。

広い玄関で僕が待っていると、ユウヤがお母さんを連れて二階から降りてきた。ユウヤのお母さんは、黒のタンクトップに細身のジーンズ姿。長い癖毛を後ろで束ねている様子は、僕の母とはあまりに違い、まるで、ロックミュージシャンのようだなと思った。

「あらま、すごいことになっちゃったんだねえ」

ユウヤのお母さんは、笑いながらそういった。

「すみません、こんな夜遅くに」

「いいの、いいの。余計な心配はいらないから。それよりもだ、ユウヤから事情は聞いたんだけど、君

はどうしたい？」

「…」

すぐに返事ができなかった。

「服は洗えるけど、すぐには乾かないし」

ユウヤがいった。

「乾燥機に入れたら？」

「それでも、一時間はかかるわよ。それに君たちの心配は服なの？ それより夜遊びをうちの人にばれるのが困るでしょ。洗いたての服を着て帰ったら、それはそれで怪しまれるわよ」

「分かっちゃうかなあ？」

「親をなめないでよ。ズボンについた泥や、草の種で、君たちがどこで遊んできたのか、何をしてきたのかなんで、全部お見通しよ」

（どうしよう…）

困り果てた僕に、ユウヤのお母さんはいった。

「よし、今日はうちに泊まっちゃいな。そうすれば、全部解決。証拠隠滅もできるしね」

「えっ、いいんですか」

「遠慮はいらないよ。君が困らなければ、問題なし。ユウヤも、それでいいでしょ」

「ああ」

「じゃ、電話すつか。ヒロキの母さんなら知ってるし。私が話をしてあげるから、君もちゃんとお母さんに頼むんだよ。分かった？」

「はいっ！」

礼儀正しく返事をする僕を見て、ユウヤはニヤニヤと笑った。

結局、僕はユウヤの家に泊まることになった。ユウヤのお母さんは、さつきとは別人のようないない口調で僕の母と挨拶をかわし、コンビニで話しこんだら盛り上がりつつあったとウソをついて、この話をみごとにまとめ上げた。

僕はユウヤのスウェットに着替え、リビングで冷たい麦茶を飲んでいた。

「すごいでしょ、うちの母さん」

「うん、圧倒された」

「ちゃんと裏と表のある人間になりなさいってのが、口癖なんだ」

「何だそれ。普通は、裏のない人間になりなさいだろ」

「普通じゃないんだよ、あの人は。裏だけ、表だけじゃ、人間は幸せになれないんだってさ。裏も表も大事にしなさいが口癖。変だろ」

変だとは思う。しかし、何か納得できる。

「ううん、何かかっこいいよ」

本当にそう思った。さつき、あの状況の中で、ユウヤのお母さんは、僕にまず『君はどうしたい？』

と聞いたのだ。自分の母さんだったら、ああしなさい、こうしなさいというだけで、あんな風にたずねることはしない。

「ふうん、そんなもんかなあ」

しばらくすると、ユウヤのお母さんが、洗面所から帰ってきた。

「よしよし、あとは洗濯機が全部やってくれるよ」

「ありがとうございます」

僕がお礼をいうと、ユウヤのお母さんは食器棚の引き出しから、タバコを取り出して火をつけた。

「いいの、いいの。うちはこの子と二人つきりだから遠慮しないで。」

それにね、こっちが感謝してるんだから。この子、いっちょまえに不登校とか決めこんでんじやない。人間ぎらいになったんじやないかって、心配してたのよ」

ユウヤがいった。

「何、そのいい方。六年生にもなったんだから、学校へ行くか行かないかは自分で決めろっていったの、母さんじゃん」

「いったけどさ、本当に行かないとは思わないじゃない。あははっ、ねえ、この子、変わってるでしょ」

「……」

返事に困った。変わっているとは思っていたが、お母さんの方が変わっている。

「ほら、ヒロキが困っているだろ」

「はいはい。まあ、夜中に連れてくる友だちがいるんだから安心ね。ほっとしたわ。母さんは二階で仕事してくるから、あんまり夜ふかしするんじゃないよ」

ユウヤのお母さんはそういうと、軽い足取りで階段を上がっていった。

「こんな時間まで仕事？」

「こんな時間から仕事さ。雑誌のライターなんだよ。だから、仕事中に話しかけないのが昔から僕の親孝行。さ、僕の部屋に行こうか」

部屋に入るとユウヤは、池から持ってきた小魚を水槽に放した。何でもこの水槽は、以前、金魚を飼っていたときのものです。今日の昼間、新しい水を入れ、ろ過器もセットしたらしい。

水槽に入れられた魚たちは、しばらく右往左往していたが、やがて落ち着きを取りもどし、メダカはメダカ、フナはフナというように、小さな群れを作った。

「へー、メダカの目玉って、白目の上の方が青いんだ」

「モツゴって、口が上を向いてるぜ。変なの」

バケツでは、よく見えなかった魚の顔が、はつきりと見えた。

「おっ、ドジョウが砂に潜った」

「見て見て、砂から目玉だけ出してる」

僕たちは、この小さな水族館を飽きることなくながめ、小さな魚のかわいい動きに歓喜の声を上げた。しばらくすると、ユウヤは何かを思いだしたように本棚に向かい、分厚い図鑑を持って机に向かった。

「魚類図鑑？」

「うん、ちょっと、気になることがあってね」

それからユウヤは黙りこみ、本を読み続けた。しかたがないので、僕は床に横になり、水槽を見上げながらぼんやりと考えた。

つかまえた魚のこと、おぼけ池のトンネルのこと、湧き水のこと、そして、目の前を横ぎった大きな黒いヘビのこと。

（いったい、あれは何だったんだらう？）

ユウヤのことも考えた。

頭もいいし、悪いやつじゃないのに、どうして学校に来ないんだらう。果たして学校に来る気はあるんだらうか。ユウヤのお母さんは、そのことをどう思っているんだらう。

いろんなことを考えすぎて、頭の中がぐるぐるした。考えても分からないことばかりだ。分かったことといえば、おぼけ池にメダカやフナがいたことだけだ。でも、それだけでも、誰も知らない発見だ。

僕は、濃密な一日に疲れ果て、そのまま眠ってしまった。

「ヒロキ、ベッドで寝ようぜ」

そういって、僕を起こしたのはユウヤだった。時計を見ると、もう午前0時だった。僕は二時間も寝てしまったことになる。うす暗い部屋に、デスクライトだけがこうこうと灯っていた。

「ずっと。本を読んでいたのか？」

「まあな。そんなことより、大発見」

「大発見…？」まだ、しっかりと目が覚めていなかった。

「ヒロキの見た黒いへビの正体だよ。あれは、きつとウナギだ」

「ウナギって、海の魚じゃないの？ それに、生きたウナギはウナギ屋さんで見たけど、あんなに大きくなかったぞ。僕のは腕より太かったんだぜ、こーんなに、でかかったんだ」

両手を広げる僕に、ユウヤが凶鑑を差しだした。

「ここ、見てよ」

ウナギ。へビのように体を横にくねらせて推進力を得るため遊泳速度は遅い。池から川、汽水域まで、どこにでも生息。嗅覚はイヌに匹敵するほど優れており、甲殻類や魚を丸呑みする。

一般的に淡水魚として知られているが、海で産卵・孵化を行い、淡水にさかのぼってくる。産卵地は日本から2000kmも離れたマリアナ諸島沖、幼魚は日本まで旅をして川を上る。成熟するのに10年、寿命は産卵をしなければ80年といわれるが、詳しいことは判明していない。体長は100cmを超える。

ユウヤの指は、最後の一行を差ししていた。

「体長は百センチを超える…」

「どうよ、おばけ池にアナコンダがすんでいるっていうより、うんとリアリテイがあるでしょ」

「だけどさ、ウナギって、本当に一メートルにもなるのか？」

「うな井になる五十センチくらいのは、まだまだ、子どもだったみたいだな。僕もあれが大人だと思っ  
てたよ」

「うーん。まだ信じられねーや」

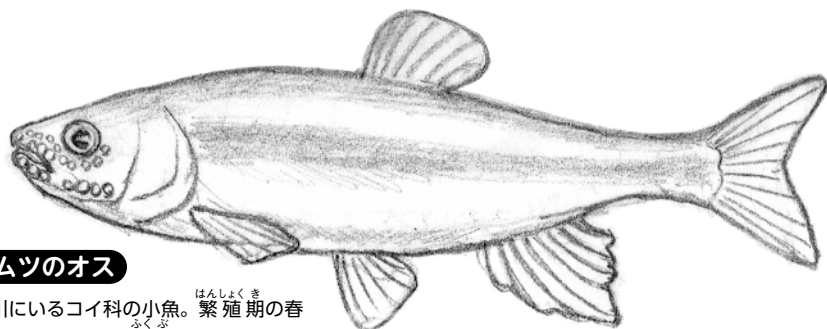
「だからさ、確かめようよ、二人で」

「確かめるって？」

「もちろん、つかまえるんだよ」

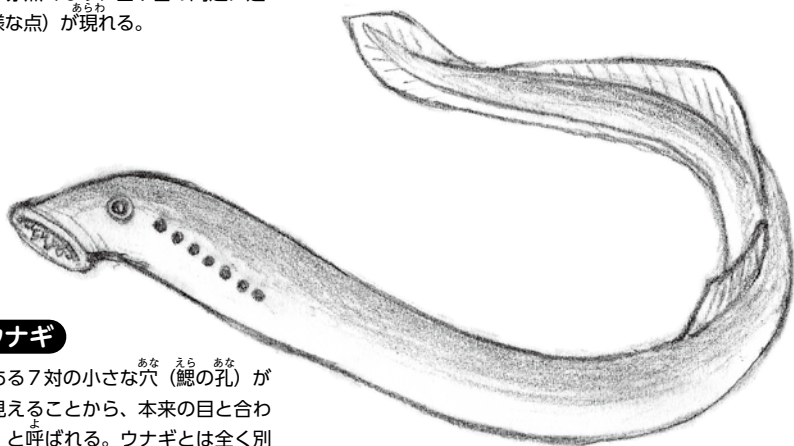
ユウヤのこの提案を、断る理由はどこにもなかった。

僕たちはベットに横になり、大ウナギ捕獲への夢をふくらませた。明日は土曜日で学校は休みだ。あと一週間もすれば、夏休みになる。



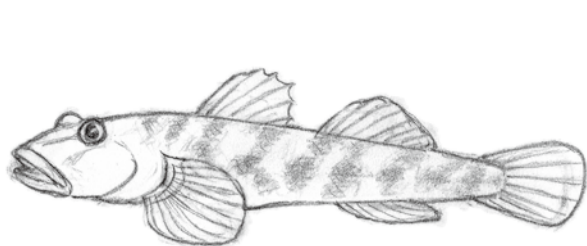
**カワムツのオス**

身近な川にいるコイ科の小魚。繁殖期の春から夏にかけて、オスは腹部の赤色の部分が広がり、顔は赤黒くなり、口や目の周辺に追星（イボの様な点）が現れる。



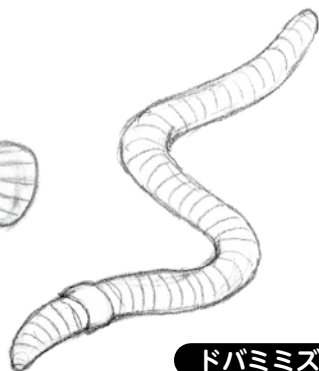
**ヤツメウナギ**

目の後ろにある7対の小さな穴（鰓の孔）が目のように見えることから、本来の目と合わせて「八目」と呼ばれる。ウナギとは全く別の種類で、生きている化石といわれる。



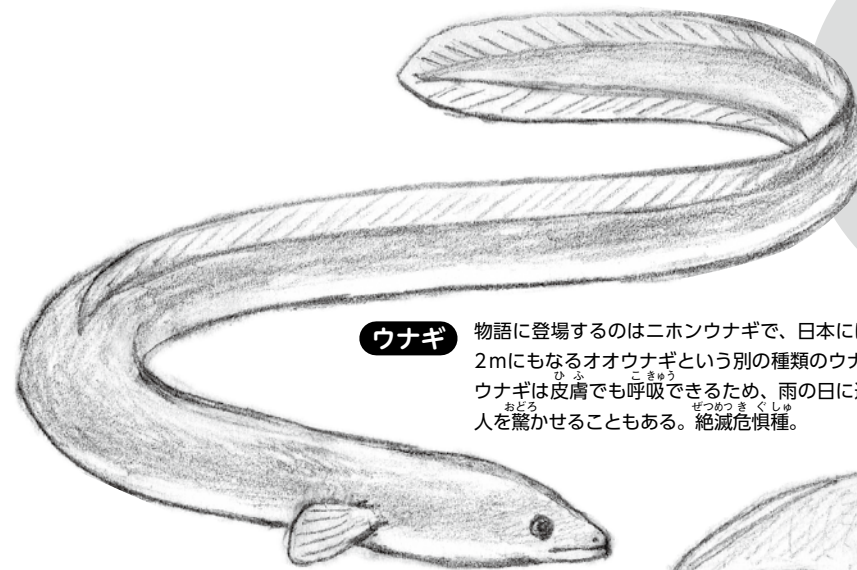
**ヨシノボリ**

ハゼの仲間の小型の魚で、汽水（海水と川の水が混ざった水）から淡水に生息する。お腹のヒレが吸盤ようになっていて、流れが速い川でも生息している。



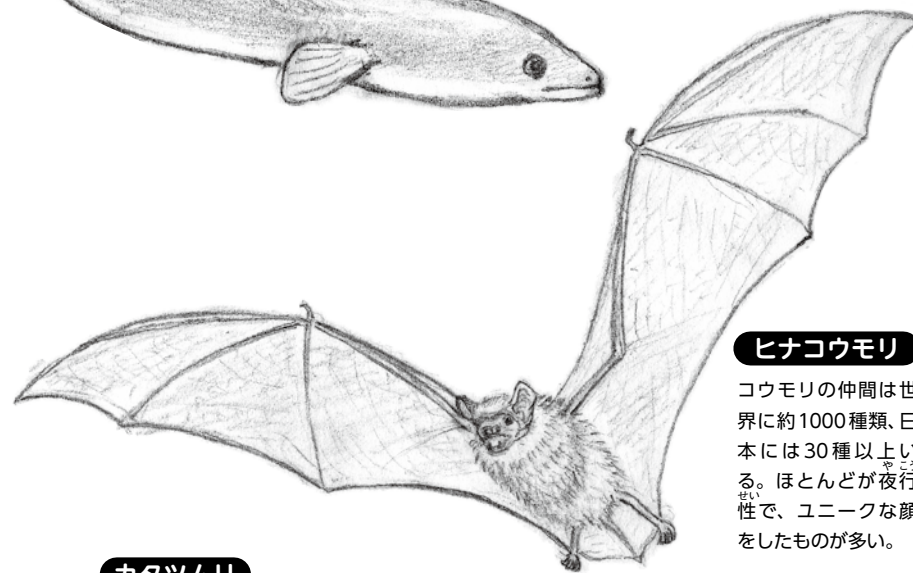
**ドバミミズ**

身近によく見られる細長いミミズより、太くて長い特大サイズのミミズがフトミミズ科のドバミミズで、ウナギやナマズの釣り餌としてよく使われる。ミミズが多いとフカフカの良い土ができる。



**ウナギ**

物語に登場するのはニホンウナギで、日本には他に全長2mにもなるオオウナギという別の種類のウナギもいる。ウナギは皮膚でも呼吸できるため、雨の日に道に現れて人を驚かせることもある。絶滅危惧種。



**ヒナコウモリ**

コウモリの仲間は世界に約1000種類、日本には30種以上いる。ほとんどが夜行性で、ユニークな顔をしたものが多い。

**カタツムリ**

貝の仲間は海や川など水の中だけでなく、陸にも生息する。それを陸貝と呼び、殻があるのはカタツムリ、ないものをナメクジと呼んでいる。



**ヤゴ**

トンボの幼虫で、種類によって形が違ふ。水の中で折りたたみ式の下あごを一瞬で伸ばし、昆虫やエビ、魚をとらえて食べる。

### 3 トンネルを抜けたら

夏休みに入ると、僕たちは昼間から大手を振って遊ぶことができた。

「久しぶりだな。こんな風に歩くのは」

ユウヤがまぶしそうに、空を見上げていった。三か月もの間、夜しか出歩かない生活は、さぞかし退屈だったに違いない。僕はユウヤに聞いてみた。

「お前さ、家の中で、毎日、何をしてたんだよ？」

「何してたんだろ？なあ、部屋の中で本を読んだり、映画を見たり…、よく覚えていないや」

「退屈だったろ？」

「それでもないよ。あつ、そうだ。一つだけ分かったことがある」

「何、何？」

「勉強つてさ、学校より、家でやった方がはかどるみたい。教科書はもう、みんなより、ずいぶん進んじやったよ」

何て、かわいげのないやつだ。普通、不登校になんてなったら勉強の遅れを気にするところなのに、こいつは家にいながらも、一人で学校の勉強をしていたに違いない。しかし、そんなところが、ユウヤらしいなと思った。

「さて、行くか」

僕たちは、これから、おばけ池のトンネル探検に行くのだ。

いつものように自動販売機の前であたりを見わたし、まず、持ってきたアミをフェンスの向こうに投げこんだ。昼間、ここへ来るのは初めてなので、いつもより緊張する。車の通りも多いし、フェンスに貼られた『立ち入り禁止』の看板も目立つ。

「よし、今だ！」

僕たちは、車がとぎれた瞬間に、五秒でフェンスを乗り越えた。そして、すばやく草むらに身を隠した。「いいか、トンネルまでは三十メートル。一気に駆けこむぞ」

草むらからトンネルまでは、何一つ、隠れる場所はない。ここは覚悟を決めて、走りきるだけだ。

「行こう！」

駆けだしたユウヤについて、僕も全速力で走った。たった数秒のことだが、人に見られたらすべてが終わる。立ち入り禁止の場所で子どもを見つけたら、大人たちは学校や警察に電話をするに違いない。だから、必死だった。

「ゴール！ 大丈夫か？」

「うん、誰にも見られてないはず」

はあはあと息をきらせながらも、お互いに笑みがこぼれた。

トンネルの中はうす暗かったが、何とか歩いていけるようだった。

「出口が見えないな」

「ま、行けるところまで行ってみよう」

さらさらと流れる水路の脇を、僕たちはゆっくりと歩いた。水路は、コンクリートのマスで、水は三センチほどの深さだった。何の変化もなく、ただ水だけが均一に流れていた。

「これじゃ、魚なんていないな」

ユウヤのつまらなそうな声が、トンネルの中に響きわたった。

下り坂のようなトンネルをさらに進むと、水路はゆるく左にカーブしていた。カーブを進むと、だんだんあたりが暗くなり、振り返ると、もう入り口は見えなくなっていた。

「探検っていうより、こりゃ、きもだめしだな」

「おっ、ヒロキ、心細くなってきたの？」

ユウヤが冷やかすので、僕はやつを追い越していい返した。

「ばーか、俺は夜のおぼけ池で遊ぶ男だぜ。こんなトンネル平気に決まってるだろ」

「あはははっ、確かにね」

でも、分かっていた。僕がおぼけ池に行けたのは、そこにユウヤがいたからだし、このトンネルを進めるのも、隣にユウヤがいるからだ。一人だったら絶対無理。それ以前に、入ろうとも思わない。

そのときだった。僕の前方に黒いかたまりが三つ見えた。かたまりはコンクリートの低い天井にぶら下がっている。

(何だろう?)

このまま行けば頭に当たる。しかし、動きもしないので気にせず歩いていくと…。

「うわあ！」

あまりのおどろきに、僕は後ずさり、後ろにいるユウヤにぶつかった。

「どうした、ヒロキ、どうした？」

「あれ、あれ、あれ！」

黒いかたまりには、みにくい顔があった。

「うわあ、コウモリだあ。すごーい！」

(おいおい、そこは一緒にこわがるところだろ)

僕はしりもちをつきながら、そう突っこみを入れた。しかし、相手はユウヤだからしかたない。危険な生き物も、気持ちの悪い生き物も、何でもかんでも「面白い」というやつなのだ。案の定、ユウヤはいった。

「見て見て、面白いよ。かわいいけど変な顔。それにしても、こいつ、本当に逆立ちして寝るんだな。マンガみたい。へー、爪で止まるんだ。でもさ、こんな平らなコンクリートに、よくつかまれるもんだね。寝相が悪くて落っこちたりしないのかなあ」

興奮するユウヤを見ていたら、何だか笑いがこみ上げてきた。

「よいしょっと。そいつ襲いかかってこないのか？」

「大人しそうだよ」

「血とか吸すられないか？」

「吸血きゅうけつコウモリは、日本にはいないよ。よく見るイエコウモリより少し大きいから、きつとヒナコウモリだと思う。それにしてもすごいよな、こんなところで、コウモリが寝ねていたなんて大発見だ」  
少しこわかったが、僕ぼくもコウモリを観察した。

ユウヤのいうように、コウモリは変な顔だった。目は真つ黒で麻あさの実のように小さい。そのくせ耳はメツチャでかい。

「超音波ちゆうおんぱを聞きとるためかなあ？」

「たぶんね。だけどさ、面白いよね。みんな、コウモリが超音波で虫を捕とることは知っているくせに、こんなところで寝ているなんて知らない。凶鑑ずかんには木のうろで寝るって書いてあるからね」

確かにその通りだ。こんな学校の先生だつて知らないはずだ。

ユウヤが静かに指を伸ばして、コウモリの背せなか中をさわった。

「おおっ」

「どうした？」

「ヒロキもさわってごらん、そうすれば分かる」

こんなさわりたくはなかったが、弱虫と思われのはいやだ。僕おれも恐るおそる指を伸ばし、コウモリをさわってみた。

「どう？」

「うわっ、毛が生えている。で、あつたかい」

これはおどろきだった。何だか、ネズミのような感じ。

「やっぱ、さわってみなきゃ、分かんないよな」

それから僕たちは、またトンネルの先を目指した。ユウヤは、コウモリを一匹びき持つて帰るといいだししたが、それは帰りにすればいいと阻止そしした。だって、こんなのを手にしたら、気が散たって探検たんけんどころではなくなってしまう。しばらく歩いたが、トンネルの出口はなかなか見えてこなかった。僕は心配になつていった。

「このトンネル、本当に出口はあるのかなあ」

「入り口があるんだから、出口もあるでしょ。でも、最悪なのは、このトンネルが地下の下水につながっていた場合だよ。そしたら、この冒険ぼうけんもおしまい」

ユウヤが、後ろでそう答えた。

実はこのトンネル探検には、意味があった。この前見た巨大生物きょだいせいぶつが、もしウナギであるのなら、ウナギがどこから来たかが気になった。凶鑑ずかんには、ウナギは海で産まれて川をさかのぼるとあった。

(果たしておぼけ池は、ちゃんと海につながっているのだろうか?) 僕たちは、そんな素朴そぼくな疑問ぎもんをいだいたのだ。もし、つながっていなかったら、あのウナギは海に帰ることができないことになる。

しばらく歩くと、トンネルの勾配こうばいがだんだんきつくなつた。そして、周りが少しずつ明るくなり、やがて遠くに出口が見えた。



「出口だ！」

僕たちは、だんだん早歩きになった。

「あの向こうはどうなっているんだろう」

自然と駆け足になった。小さかった出口の光が、どんどん大きくなってくる。そして、僕たちは、その光の中に飛びこんだ。

「うひゃあ、まぶしーっ」

そこには、きれいな小川があった。川の向こうには背の高い木が立ち並び、キジバトの鳴き声が響いていた。トンネルを流れてた水は岩盤にぶつかり、岩肌をぬらしながら川へ流れこんでいる。その岩のすぐ向こうには、こじんまりとした淵があった。

「小さな滝つぼみたいだな」

「そうか。大雨のときあふれだした水が、一気にここへ流れでるんだ。だから、ここだけ掘れているんだよ、きつと」

毎度のことながら、ユウヤの分析力には舌を巻く。感心しながら滝つぼの中を見ると、そこにはおどろくほどの魚がいた。

「あつ、魚だ…。すげえ！」

百とか、二百とか、そんな数ではない。数千、数万の小魚が重なりあうように群れていた。川の底には大物もいる。こんな魚を目の当たりにして、じつとしていられるわけがなかった。

「行こう！」

「うん！」

僕たちは、アミを手には岩盤の上から淵の中に飛びこんだ。

ガツボーン。

穏やかだった水面に僕たちの足が突き刺さると、白い水しぶきが高く跳ね上がった。その向こうに、弾けるようなユウヤの笑顔があった。おそらく僕も、あんな顔をしているのだろう。

「ぎゃはははっ」

意味もなく、笑い声を上げていた。

「ん？ ヒロキ、砂の中に足を突っこんでみてよ」

僕はいわれるままに、淵の底のふかふかした砂に足を突っこんだ。

「うはっ、冷たい！」

砂の中に冷たい水を感じた。ユウヤの話では、川には二つの流れがあるという。一つは地上を流れる目に見える流れ、もう一つは、地下を流れる目に見えない流れ。

「伏流水というんだ。ここは川底が掘れているから、伏流水が湧きだしているんだよ」  
なるほどなあと納得したが、僕の体は勝手に浅瀬に向かっていった。

飛びこんだと同時に、淵の魚が消えたからだ。浅瀬の草陰に隠れたに違いない。草の奥にアミを置き、上流から足で魚を追いこんだ。

ガサガサガサ。

「よし、入った！」

でっかくて腹の赤い魚だった。体の中央には紺色のラインが一本、ヒレは黄色く見えた。

「おっ、カワムツのオスだ」

「何でオスって分かるの？」

「この色は婚姻色っていつてさ、オスだけに現れるんだ。モテたい男のお化粧なんだ」

「キモッ、男のくせに：」と、いいかけて気がついた。「そういえば、鳥も、きれいなのは、ほとんどオスだ：」

「そう、みんな女にモテたいんだよ」

「でもさ、婚姻色のない生き物もあるだろ」

「そういうやつは、セミや、カエルのようにオスだけが鳴いてメスを誘う。他には、イモリやタガメのようにダンスをするやつもいる」

「あはっ、変なの」

「変なことないよ。生き物のオスはみんなモテたくて必死なんだ。僕たちも数年したら、化粧して駅前でダンスを踊ったり、ギターを持って歌ってるかもね。そうだ、二人でバンドでも組もうか？」

「あはははっ、よせやい」

僕は笑ってごまかしたが、本当にユウヤの言葉には、教科書とは違う説得力があると思った。

それから僕たちは、話もせずに、本気で魚を追いかけた。

バケツを持ってこなかったので、岸辺の砂に穴を掘り、石で囲んでいけすを作った。つかまえた魚は、全部いけすに入れた。

つかまえては魚をながめ、またつかまえては魚をながめる。そんなことを繰り返すうちに、時間だけがどんどん経った。

「ユウヤ、俺、発見したぜ」

「ん？ 何を」

「カワムツは草に隠れるけど、ヨシノボリは石に隠れる。魚によって、隠れる場所の好みが違うみたいなんだ」

「おっ、面白い。そんな風に考えたことなかったよ。確かに、そういえばそうだね。じゃ、砂に隠れるのは？」

「そんなのいるのか？」

「よし、やってみよう」

ユウヤの指示で、僕は浅瀬に二つのアミを構えた。アミの上流は砂地で、泳いでいる魚の姿はない。この砂の中からユウヤが魚を追いだし、僕がアミを上げるといいう作戦だ。

「行くぞー」

ユウヤが五メートルほど上流から、足で砂をかき混ぜながら下りてきた。川の流に砂煙が上がり、

そのにがりがアミの中を通過した。(果たして、砂の中から魚は出てくるのだろうか?) ユウヤの足がアミの前まで来たとき、僕は二つのアミを持ち上げた。

「おっ、何だこれ?」

二つのアミの中には、キラキラした白っぽい魚と、平べったい虫が数匹入っていた。

「すごい、カマツカだ。カマツカは別名スナモグリっていうんだけどさ、本当に砂に潜ってるんだあ。ほら、こいつの背中、砂の色と一緒」確かにカマツカの背中は保護色で、砂と同じ色をしていた。

「もっとすごいのは、こいつだよ」ユウヤが指を差した。

「何これ? 枯れ葉みたいだけど」

「ヤゴだよ」

「えっ、この前のヤゴと、ぜんぜん形が違う」

「この前のはギンヤンマ、こいつはコオニヤンマのヤゴ。まさか、砂の中に潜るなんて、本には書いてなかったぞ。すごいや」

ユウヤは興奮しながら、獲物をいけすに運んでいった。僕はちよつと悔しかった。ユウヤのように生き物の名前や価値を知らないのも、あんな風に興奮ができない。

(やっぱり、図鑑でも読もうかなあ)

そう思いながら、アミを置き、砂の中をガサガサやった。すると、ミミズのように細長い魚が、一匹アミに入った。

(やったあ! ウナギだ)

魚の名前は知らないが、このくねくねした動きは、他の魚とはぜんぜん違うから分かる。僕は、興奮を抑え、ユウヤにいった。

「ひよつとして、これ? ウナギか?」

ユウヤはアミをのぞきこみ、真剣な顔で僕にいった。

「ウナギじゃない。こいつはヤツメウナギだ」

「何だ…」

ちよつと、残念だ。しかし…。

「おいおい、何がっかりしているんだよ。ここじゃ、ヤツメウナギは超絶滅危惧種なんだ。ある意味、ウナギよりも大発見だよ」

「本当か?」

「本当さ。すごいよ、あー、この川は、大発見だらけだ」

どのくらい遊んだらうか。僕たちは疲れ果てて、岩盤の上に座っていた。

「うーん、魚捕りってやつは難しい」

「何いってるんだよ、いっぱい捕ってたじゃん」

「最初に淵で見た大物は、ほとんど捕れてない」

「へへへっ、ついこの前、ザリガニ二匹で大喜びしていたのに。人間というのは変われば変わるもんだ」

「ふんっ、ばかにすんなよ。向上心があるといってくれ」

ユウヤは、僕の顔を見てニヤニヤと笑った。

「それにしても、ここはどこなんだろうなあ？」

魚捕りに夢中になり、すっかり忘れていたが、それは重要な問題だった。僕はトンネルの横の斜面に登り、森の奥をながめた。木々がじゃまをして、周りは見えない。しかし、一か所だけ、枝の間から黒い屋根瓦が見えた。

「あっ、建物があるぞ。…そうか、分かった。神社だ。ここは稲荷神社の森の奥だよ」

突然、ユウヤが立ち上がり、川の中を上流に向かって歩きだした。僕も斜面を駆け下りて後に続いた。しばらく行くと、コンクリートブロックの壁に川は行く手をはばまれた。壁の高さは十メートルもあるだろうか。川はそこで、不自然に断ちきれていた。

「ほら、上を見てよ。道だ、ガードレールがある」

「ということは…、分かった！」

僕たちの位置が、神社と道路との位置関係でつながった。

「そうか、一里川だ！」

おぼけ池と一里川がつながった。

一里川というのは、その名の通りたった四キロの短い川で、下流は、仁の川という一級河川にそそいでいる。一里川の源流は稲荷神社の奥の湧き水というのが、学校で習った僕たちの常識だった。しかし、

実際はそうではなかったようだ。

昔、おぼけ池から流れでた水は、団地の丘をぐるりと回ってここに流れていたのだろう。しかし、そこが埋め立てられて広い道路になった。そこで、おぼけ池からあふれる水を流すトンネルを作ったというわけだ。

「こりゃ、川のバイパス手術だな」

ユウヤが大人びた顔でそういった。

「だけど、これで、おぼけ池と海とがつながったぜ」

「うん、一里川が四キロ、仁の川が海まで十五キロ。合わせて二十キロで海まで行ける」

「二十キロって、遠いのか？」

「自転車で、一時間ちよいかな」

「なあ、今度、海まで冒険に行かない？」

「いいね、いいね。それより、帰りは神社の方から行ってみようよ。どこに出るのか見てみたい」

それは僕も考えていたことだ。僕たちは滝つぼに戻り、そこから川を下流に下った。

結局、川の両岸は木や草で覆われ、どこからも上がることはできなかった。要するに川に近づく道がないのだ。しかし、この事実は僕たちにとって、嬉しいことだった。

「滝つぼのことは、誰も知らないね」

「うん、川の中を歩く変わり者は、いないからな」

僕たちは、ここを夜のおぼけ池に続く『秘密の遊び場』に決めた。そして、神社の前にある洗い場から岸が上がった。それから、石の階段を上がり、大きな鳥居の横を通り、一里川にかかる小さな橋をわたった。目の前には広がる田んぼと、大きな道路につながる砂利道があった。僕たちはこの砂利道をふざけながら歩いた。

このあたりに田んぼがあることは知っていたが、こんな風に歩いたことはなかった。いつも車の中から見ていただけだ。ユウヤが意味もなく駆けだしたので、つられて僕も追いかけた。そして、広い道路に出ると、僕たちは並んで歩いた。前方には、僕たちの住むみどり丘の丘の広い丘があった。坂の入り口で、ユウヤがガードレールの向こうを見ていった。

「ここだよ、この奥が秘密の滝つぼ」

「へへっ、昔はこの道路の下に、川があったんだなあ」

僕は、父が子どものころ遊んだという川の上を、ユウヤと二人で歩いた。

#### 4 一生は生きられない

それから二週間、僕たちは毎日のように会い、何度も一里川の滝つぼへ出かけた。おぼけ池からのトンネルルートは使わず、少し遠回りでも道路を使った。こそこそと人目を避けていくスリルも捨てがた

かったが、大ウナギを釣るまではリスクは避けたかった。

今日は朝から、どしゃぶりの雨。

予定を変更し、僕の部屋で作戦会議となった。ユウヤが、棚の水槽をながめていった。

「へえ、水槽が三つもあるんだ」

「百均の水槽だけだな」

「これはクワガタで、これはザリガニ、ん、これは？」

「魚水槽なんだけど、昨日全部死んだ」

「全部？」

「水槽が小さいから、一匹死ぬと水が腐って全部死ぬんだ。もう、臭くってまいったよ。それ以上に、母さんがうるさくって」

「ま、それはしかたない。……おっ、ヒロキも図鑑を読んでるんだ」

ユウヤが、机の上の淡水魚図鑑を見つけた。

「何でもかんでも、ユウヤに聞いてばかりだからな。でもさ、面白いんだ。分厚くて読む気にもなれなかったんだけど、つかまえた魚のページは頭に入る」

「あはははっ、そんなもんだよ。僕だって図鑑を広げるのは答えあわせのようなものさ」

「答えあわせ？」

「前にもいったろ、知識より体験だって。それよりさ、大ウナギ釣りの計画をそろそろちゃんと立てな

いと」

「うん」

これまでも僕たちは、ウナギ釣りの話を何度もしてきた。どんなエサがいいとか、どんな仕掛けがいいとか、釣り上げたらどうするかとか。そんなことを想像するのは、時間を忘れるほど楽しかった。しかし、計画はいつこうに進まなかった。

何しろ、僕もユウヤも、釣りの経験がほとんどない。おまけに、大ウナギがおぼけ池のどこに潜んでいるのかも分らないのだ。何とか攻略の糸口をつかもうと、夜のおぼけ池にも行った。しかし、あの日見た大ウナギの姿を確認することはできなかった。

(果たして、僕が目撃したのは、本当にウナギだったんだろうか?)

そんな気持ちにすらなってくる。

「本当に、大ウナギなんているのかなあ?」

「おいおい、唯一の目撃者が、弱音を吐いてどうするの」

「だって、ぜんぜん見つからないじゃん」

「そりゃ、ウナギだって、見つからないように隠れてるんだよ」

かなりのお手上げ状態だったが、ユウヤが僕だけが見たウナギを『いる』と信じてくれていることだけが救いだった。

トン、トン、トン。

階段を上る足音が聞こえ、父さんが部屋に入ってきた。

「よっ、スイカ、食うか?」

「ありがとうございます」

ユウヤが緊張気味にお礼をいうと、父さんはスイカをのせたお盆をテーブルに置き、そのままどかと床に座った。

「ええっ、父さんもここで食べるの?」

「いいじゃん、楽しそうだし。なあ」

ユウヤが、ぺこりと頭を下げた。

「ごめんな、うちの父さん、空気が読めなくて」

僕がそういうと、ユウヤが答えた。

「大丈夫、僕も空気が読めないから」

しまったと思った。ユウヤが不登校になる前、クラスの仲間はユウヤのことを、空気が読めないやつと呼んでいたのだ。僕はそれを口にはしていないが、心の中では同じように思っていた。同罪だと思う。僕が黙っていると、父さんが話した。

「だいたいだな、『空気を読め』だなんて誰がいいだしたんだ。そんなのはいつも、多数派の暴力だ。いちいち空気を読んでたら、自分の意見なんていえないよなあ。そんなこというやつらは、一生、いいたいこともいわず、やりたいこともやらず、びくびくしてればいい」

父さんの言葉は、僕の胸に突き刺さった。

「俺にいつてる？」

「ううん。だって、お前は今、好きなことやってんだろ」

ドキツとした。そして、ユウヤのお母さんのいった「親をなめないですよ」という言葉を思いだした。

（父さんは、ここ最近の僕の行動に、何かを感じているのだろうか？ ひよつとして、作戦がばれた？）

ユウヤが、話題を変えるように父さんにいった。

「あっ、そうだ」

「何だ？」

「おじさんは子どものころ、おばけ池や一里川で遊んだんだよねえ」

「うん、遊んだよ」

「そのころウナギって、いましたか？」

「ああ、けっこういたなあ。子どもにや、なかなか捕れない魚だけど、鉛筆みたいな細いやつは、うじゃうじゃいたよ」

「うじゃうじゃ？」

「ああ、夏になると堰の下に真っ黒になって固まっていたよ。山ほどつかまえて小学校のニワトリに食わしたくらいだ。ここは海が近いからなあ」

初めて聞く話だった。僕は、身乗りだして聞いた。

「近いって、海まで二十キロもあるよ」

「ウナギはすごいんだよ。あいつら、寿命は長いし、生命力は強いからな。川なんて五十キロでも、百キロでも平気で上るさ。それが証拠に、日本中、河口から山の上のため池まで、どこにでもいるだろ。本当にあいつらは強い魚だ」

「強いつて、ウナギは絶滅危惧種だろ」

「それとこれとは話が別だ。弱いから絶滅しかけてるわけじゃない。まあ聞けよ。俺が子どものころ、家で飼って長生きしたのは、ウナギと、フナと、メダカだぞ。ウナギはエサもやらないのに、水槽で半年以上平気だったし」

「マジ？」

「マジ。メダカなんかさ、外に置きっぱなしのおけの中で五年も生きてた。後で気がついたんだけどな、メダカの寿命は一年らしい。どうやら、おけの中で卵を産んで世代交代してたみたいだ」

「飼ってて、気がつかなかったのかよ？」

「ばーか、つかまえるのが子どもの仕事だ。観察なんてするかよ。でも、おけの中で増えるなんて強い魚だろ」

「すごい！」と、ユウヤがいった。

「ん？」

「おじさんの話、面白い。図鑑に書いてあることより百倍面白い」

父さんは、普段、誰からも褒められたことなどないので、かなり動揺した様子だった。

「まあ、ウナギにエサやらないなんて、図鑑には書けないよな」

「そうじゃなくてさ、ウナギは海に下るとき、自ら断食するんだって。普通の魚はエサを食べないと衰弱するんだけど、ウナギは食べないことで筋肉に脂をため、生殖巣が成熟するんだって」

「図鑑に書いてあったのか？」

「うん。でも、おじさんはさ、図鑑なんか見なくても、ウナギが断食できることを知ってたんだ」

「ま、まあな…」

たぶん父さんは、ユウヤのいつていることが半分も理解できていないはずだ。しかし、褒められていることだけは感じたようだ。

「で、おじさん。大きなウナギって、どうやって捕るの？」

「まあ、竹筒のわなをしかけたり、釣りをしたりするんだらうけどなあ。簡単なのは、穴釣りかな」

「穴釣り？」

「ウナギには、決まったねぐらがあるんだよ。それは、石の下だったり、アシの根もとだったり、泥の中だったりするんだけどな。あいつらが特に好きなのが、石垣の穴」

石垣と聞いて、僕とユウヤは目を合わせた。おぼけ池には、石垣がある。確か、穴もあいていた。

「どんな穴がいいの？」

「そいつは、勘だな。ウナギの出入りしそうな穴を想像するんだ。大きすぎてもだめ、小さすぎてもだ

め。まあ、ウナギの気持ちになって考えるんだな。そうそう、運がいいとな、穴の入り口にザリガニの殻が落ちていることがある。こんな穴は、要注意だ」

「それって、まさか…」

「ああ、ザリガニはウナギの大好物だからな。ほかに、アユだろ、ドバミミズだろ、小魚でも何でも食うな」

「で、釣り方は？」

「そいつは、簡単だ。針に太い糸をつけてさ…。あつ、ヒロキ、針とタコ糸持つてるか？」

「うん」

僕は、引き出しからタコ糸を出し、棚の上のタックルボックスを父さんにわたした。父さんはタックルボックスの中から、ワーム用の大きな針を取りだし、タコ糸を結んだ。

「こんな大きな針でいいの？」

「ウナギは口がでかいからな。それと、力が強い。だから、折れないことが重要だ…。よし、できた」

それは、針にタコ糸を結んだだけの単純な仕掛けだった。

「そんなんでいいの？」

「道具は、単純な方がいい」

僕は、少しおどろいた。いつも役に立たない話ばかりする父さんが、こんなに頼りになるとは。いったいどうなってしまったのだ。しかし、考えてみれば父さんはいつもと同じで、変わったのは僕の方だっ



た。父さんの昔話を、こんなに真面目に聞いたことはなかった。父さんは、僕たちの目を見ながら確かめるように話を続けた。

「いいか、この針にエサをつけるだろ。で、そのエサつきの針を、竹の棒の先にチョイと刺すんだ。で、そのまま、竹と糸を片手でにぎり、エサをウナギの穴に入れるだけだ。そうすると…」

「そうすると？」

「ゴゴゴゴゴンツて、アタリが来る。そしたら…、ゆっくり竹の棒だけを抜き取り…、タコ糸をぐるぐると手に巻いてにぎりしめ…、あとは一気に引つ張りだすだけ。このとき、躊躇してはだめだぞ。ウナギが穴の中で丸まったら、絶対に出てこないからな。とにかく力いっぱい引くんだけ。ぐぐぐぐぐぐつてな」

僕たちは、父さんの話に引きこまれていた。ユウヤが聞いた。

「おじさん、釣ったことあるの？」

「ああ、四、五匹だけだな。でも、あのドキドキ感と手の感触は、今でも忘れていないぞ。大きいもので、六十センチはあったかなあ。すぐ、蒲焼きにして食っちゃまった。うまかったなあ」

「どおりで…」

「うん？」

「どおりで、話にリアリティがあると思った。ところで、おじさん」

「何だ？」

「おじさんはどこで釣ったの、そのウナギ？」

「そこのおぼけ池だよ」

「えっ…」

僕たちは絶句した。

「昔は湧き水もあったし、石垣もあったし、いいとこだったなあ。今じゃ、コンクリートで固めちまったから、ウナギもいないだろ」

のどまで言葉が出なかった。

(石垣は昔のままコンクリートの下に隠れている。ウナギは巨大になって、まだあの池にすんでいる) そう伝えたかったが、まだ打ち明けることはできない。

ユウヤが、身を乗りだして父さんに聞いた。

「おじさんは、石垣のどこで釣ったの？」

「聞きたい？」

「うん、聞きたい」

何とも父さんは嬉しそうだった。

「しょうがねーなあ。教えちゃうか…。誰も知らないだろうが、あのおぼけ池には、二つの湧き水があるんだよ。一つは池の中央、もう一つは北側の斜面。つまりは北側の石垣の奥。だからな、昔は、ウナギを釣るなら北の石垣って決めていた」

「父さん。何で、湧き水があるといいの？」

「湧き水はさ、一年中同じ温度なんだ。だから、夏は冷たく、冬は暖かく感じる。お前も住むんなら、冷暖房完備の部屋がいいだろ」

(なるほどなあと思った)

「俺が釣ったのは、北の石垣の真ん中あたり。一つ石垣が崩れていてな、その左右に手ごろな穴があったんだ」

「おじさん、昔のこと、よく覚えてるね」

「それだけウナギが釣れたのが、嬉しかったんだらうなあ。学校の勉強や先生の名前は忘れても、こいつは忘れられないな」

「分かる、分かる」

僕たちが大笑いをしていると、母さんがやってきた。

「ユウヤくん、こんにちは」

「おじゃまします」

「いつも、ありがとうね。この前は、泊めてもらっちゃって。お母さんにもよろしくいってよ」

「はい」

母さんは優しい顔でユウヤにそういうと、顔つきを変えて父さんにいった。

「あんた、いつまでおじゃましてんのよ」

「いや、二人に大事な話を聞かせてやってたんだ」

「何いってんの。どうせ与太話なんだから。さ、行くよ」

「はい、はい」

「ごめんね、ユウヤくん。本当に空気が読めない人で」

(空気が読めない人……)

ユウヤと僕は笑いだしたくなる気持ちを抑え、歯を食いしばった。そして、我慢して、我慢して、二人が階段を下りたのを確認すると、床に転がって大笑いをした。

意外なるアドバイザーの出現により、僕たちの計画は一気に具体化した。ねらいは石垣の穴、釣り方は穴釣り、エサはドバミミズ。

昔、父さんが釣ったというやり方と同じだ。でも、それはそれで面白いと思った。

決行日は『雨が上がったらすぐに』と、いうことになった。早く釣りたいのが一番の理由だが、お盆の前に釣り上げたいと思っていた。みどりが丘団地では、お盆の三日間、盆踊り大会が盛大に行われる。そのために夜の人通りが多くなるのだ。この間は釣りができないので、雨さえ上がれば今晚でもと、僕たちは考えていた。

家を出た僕たちは、おばけ池を見下ろしながらいった。

「さすがに今日は、無理かな」

手にしたビニール傘がバラバラと雨音を立てていた。これから二人で、丘の上の公園にドバミミズを掘りにいくのだ。ミミズなど掘ったことはなかったが、何度か公園で見かけたことがある。でも、正直な話、ミミズ掘りなんてかっこ悪いし、人に見られたくはない。第一、人に「何してるの？」とたずねられたら、何と答えればいいのか？ しかし、運のいいことに、公園には誰もいなかった。

「俺が前に見たのは、あの木の下だ」  
そういつて、砂場の横を通り過ぎようとしたら、ユウヤがいった。

「あつ、いた」

花壇の横の歩道を、ミミズがはっていた。

「でかつ、二十センチはあるね。あつ、あつちにもいる」

「おつ、こつちにも」

ミミズは難なく採れた。ユウヤはそれを指でつまみ、ヨーグルトの容器に入れた。僕はさわりたくなかったので、小枝を割り箸のように使つてミミズを採った。

「雨の日は、ミミズも地上へ出るんだな」

「雨が好きなのかなあ？ それより、ヒロキ、これ気持ち悪いよ」

ユウヤがヨーグルトの容器をのぞきながらいった。見てみると、容器の中では十四ほどのドバミミズが団子になっていた。しかも、そのうちの三匹が、器用に容器からはいだそうとしている。

「ゲツ、キモツ！ ふたがないと出ちゃうぞ」

「いいよ、土を入れとけば」

ユウヤが花壇の土を容器に入れると、ミミズは落ち着いた様子で、はいだそうとはしなくなった。

あつという間にミミズが採れてしまったので、僕たちは公園をぶらぶらと歩いた。ユウヤがベンチの上でカタツムリを見つけた。

「あつ、カタツムリだ。不思議だよなあ。カタツムリもミミズも、脚がないのに、何でこんなに上手に歩けるんだろう」

ちよつと、悔しかった。

(同じように歩いているのに、何でユウヤの方が、いつも先に生き物を発見するのだろうか。よし、僕だつて…)

そして、僕は、すべり台の下で奇妙なものを発見した。

僕の見つけたのは、巨大なカタツムリだった。よく見ると、殻が二つある。(新種か?) じっくり観察してみると、これは殻が二つあるのではなく、二匹の大きなカタツムリがからみあっているのだと分かった。二匹はねつとりとした体をからませ、ゆつくりと苦しそうに動いている。

「ユウヤ、大変だ。カタツムリが共食いしてる」

ユウヤが、血相を変えて飛んできた。

「わあ、すごい！ こんな初めて見た」

ユウヤのおどろく顔を見て、嬉しくなった。僕は自慢げにいった。

「やっぱり、共食いだろ？」

「共食いじゃないんだけどね、これ、交尾だよ」

ちよつと複雑な心境だが、大発見は大発見だ。

「じゃ、これ、オスとメスなんだ」

「うーん、ちよつと、ややこしいんだけどさ。実はカタツムリって雌雄同体なんだよ」

「雌雄同体？」

「普通、生き物って、オスとメスとがいるでしょ。でもカタツムリは、一匹の体にオスの機能とメスの機能が両方あるんだよ」

「へー、変なの」

「変だよねえ」

「でもさ、オスの機能とメスの機能をもってるんなら、一匹でも卵は産めるだろ。何で合体？」

「ところがさ、雌雄同体でも、一匹では卵が産めないんだよ」

「何で？」

「何でっていわれても、神さまがそう作ったとしかいえないよ。どんなに便利な体でも、一匹では生きられないということだ」

「ふーん」

納得はできなかったが、面白い話だと思った。どんなに便利な体でも、一人では命をつなげることは

できないのだ。カタツムリは、静かに体をからめあいながら、動き続けた。

気がつけば、雨が上がっていた。西の空はうっすらと青く、夕暮れの陽が差していた。

「行けるぞ、今晚、決行だ」

「うん、今日は釣るまで帰れないね」

僕たちは、容器のミミズを確認し、カタツムリに別れを告げた。

閉じた傘をくるくる回しながら、ユウヤがいった。

「僕はヒロキンちに泊まる。ヒロキは、僕んちに泊まる。そういうことしておこう」

「OK、母さんには、そういつとくよ…。あつ、虹だ！」

振り返った僕の目に飛びこんできたのは、絵にかいたような虹だった。

## 5 大ウナギを釣るのだ

蒸し暑い夜になった。

夕食を終えた僕は、釣り針をポケットに忍ばせて、おぼけ池に向かった。濃紺の空に月はなく、星だけがぼんやりと見える。僕は、あせる心を抑えてフェンスを乗り越えた。草に残る雨粒に、街灯の光がキラキラと反射している。かまわず草の中に分け入った。半ズボンもシャツもぬれてしまったが、どうっ

てことはない。

(僕はこれから、大ウナギを釣るのだ)

ユウヤはトンネルの入り口で待っていた。大きな衣装ケースを両手で抱えている。

「何だ、それ？」

「釣れたウナギを入れようと思ってさ」

「えっ、マジで？」

「だって、一メートルもあるんでしょ。これでも、体をしの字に曲げなきゃ入らないよ。それに、こいつはふたつきだから、逃げられる心配がない」

なるほどなあと思った。僕なんか、釣ることばかり考えて、釣った後のことなんて、これっぽっちも考えていなかった。僕はユウヤに聞いてみた。

「釣れたらどうする？ やっぱり、家で飼うのか？」

「あはははっ、そんな大きな水槽はないよ。お風呂の浴槽で飼うっていう手はあるけどね」

「マジ？」

「冗談だよ。最終的には逃がしてやるっていう手もあるけどな、すぐに逃がすのはもったいなさすぎる」  
確かにその通りだ。もしあのウナギが釣れたら、これはもう一大ニュースだ。新聞にのるかもしれないし、テレビ局が来るかもしれない。それ以前に、僕たちは学校で大注目をあびることになる。

「学校へ持っていったら、スターだな」

「いいの？」

「何が？」

「そんなことしたら、僕と遊んでいることばれちゃうよ」

「そんなの、かまわないよ」

「でも、立ち入り禁止のおぼけ池で遊んでいたことまで、先生にばれちゃうな」

そいつは、ちよつと困る。先生に叱られる覚悟などできてはいるが、『二度とここで遊ばない』なんて、約束させられるのはいやだ。

「ユウヤはどうしたいんだ？」

「僕は、釣れればいい。とにかく、その巨大なウナギをよく見てみたいんだ。その後は飼ってもいいし、食べてもいいし、逃がしてもいい。だって、あいつは、海に帰りたいのかもしれないし。まあ、どっちにしても、どうするかは釣った後に、釣った方が決めることにしよう」

「うん、そうだな。よし、勝負だ！」

「いいね、いいね。勝負だ、勝負！」

僕は、ポケットから仕掛けを取りだし、その一つをユウヤにわたした。ユウヤは仕掛けをくるくるつと解き、ヨーグルトの容器から太いドバミミズを取り出した。

(ううっ、これをつけるのか：)

僕はびびったが、ユウヤは気にもせず、ミミズに釣り針をブスッと刺した。そのとたん、ミミズは大

暴れをした。さらに体からは変な汁が飛び出した。

「うひゃあ、指がねばねばになっちゃったあ。うへへへ」

笑いごとではない。気持ちが悪すぎる。

しかし、釣りとはこういうものなのだ。ユウヤも、お父さんも、こうしてミミズを針に刺したのだ。やらなくてどうする。できなきゃ、ウナギは釣れないぞ。いやがる気持ちを、無理やり理屈で封じこめた。そして覚悟を決めると、ミミズの団子に指を突っこみ、逃げようとする

ミミズを指先でつかんだ。ミミズはじたばたと暴れた。やはり、変な汁が出た。ひゃあっと声を上げ、投げ捨てたい心境だった。しかし、自分でやらなければ。これは勝負なのだ。

「ふうっ」

どうにかミミズに針を刺すことができた。ほっとして、全身から力が抜けるようだった。

「やったね」

ユウヤが後ろで、嬉しそうに笑った。

それから僕たちは、おばけ池の北側に移動して、ウナギの穴を探すことにした。ユウヤが声をひそめていった。

「いいか、ウナギは僕たちの足もとに隠れているんだ。だから、静かに歩くこと。あと、大声も立てないように」

「分かった。何だか、ドキドキするぜ」

「うん、慎重に探そう」

僕は左の端から、ユウヤは右の端から、それぞれ真ん中に向かって歩くことにした。北面の真ん中には、父さんのいうウナギの穴があるはずだ。

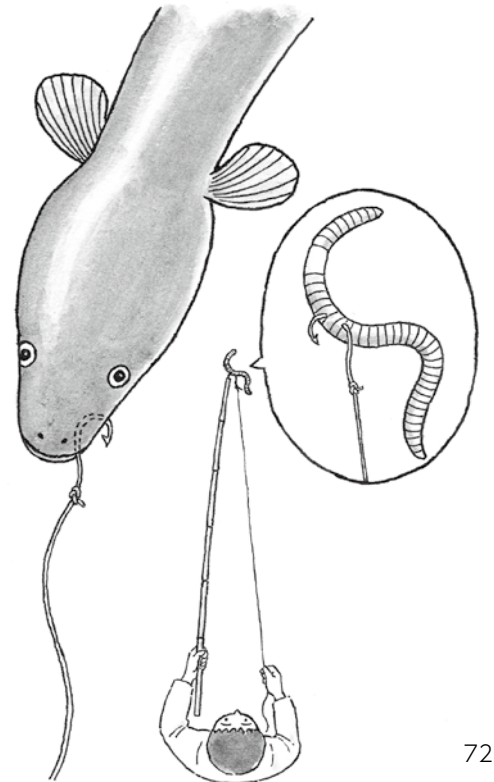
懐中電灯で水中にある石垣を照らしながら、僕はゆっくりと歩いた。しばらく行くと、石垣の石と石のすきまに、手ごろな穴があいているのが見えた。小さなエビが入り込んでいる。しかし…。

(こんな穴ではだめだ)

何しろ相手は大ウナギだ。牛乳ビンが入るほど大きくなければ、あいつは出入りできない。この穴は、見送ることにした。普通サイズのウナギなら釣れるかもしれないが、へたに音を立てて大ウナギに警戒されてはいけない。大きな穴だけをねらうことにしよう決めていたのだ。また一つ、また一つと穴があった。しかし、どれも大ウナギが入れるほどの穴ではなかった。

「おい…、ヒロキ…」

小さな声でユウヤが呼んだ。僕は仕掛けを足もとに置き、ユウヤのところへ向かった。足音を立てぬ



よう、静かに歩いた。

「どうした？」

「この穴、見てよ」

僕は、ユウヤが照らす懐中電灯の光を目で追った。

「あっ……」

「いるだろ」

ウナギだった。大ウナギではなかったが、石の穴からウナギが頭を出していた。細い鼻先とふつくらとした頬、これはウナギのシルエットだ。図鑑で何度も何度も見たのだから間違いない。

「すごい、本当にいるんだ。どうする、釣る？」

「ううん、ねらいは大ウナギだからね。でも、ちょっとだけいたずらしてみようか」

ユウヤはそういつて、ミミズを一本手に取った。そして、ミミズを穴の真上から、そっと水面に落とした。

ミミズはくねくねと動きながら、池の底へと落ちていった。その様子は、懐中電灯の光の帯がしつかりととらえていた。僕たちは息を殺して、ミミズの行方を目で追った。やがて、ミミズは穴から顔を出すウナギの鼻先まで落ちていった……

一瞬の出来事だった。

『ガッ』と、ウナギの口がミミズを捕らえた。ウナギの口は大きく、十五センチもあるミミズの半分が

口の中に消えた。そしてウナギは、口からはみだした半分を『ガッ、ガッ、ガッ』と首を振りながら、三口で、すべて飲みこんでしまった。

「……」

あまりにもリアルなウナギの行動に、僕は言葉をなくした。

「これだ、おじさんのいつてた『ゴン、ゴン、ゴン』っていうアタリは、このことだ……あっ、ごめん。大声出しちゃった」

ユウヤにしては珍しく興奮しているようだった。

ウナギがここにいることは分かった。ミミズを一発で食べることも分かった。あとは大ウナギを釣るだけだ。僕たちは再びしきり直し、大きな穴を探すことにした。

しかし、大ウナギが入りできそうな穴は、簡単には見つからなかった。

「どう？」

「だめだ、大きな穴はない」

結局、左右に分かれた僕たちの距離はどんどんと縮まり、とうとう北面の中央まで来てしまった。そして、僕はそこに崩れた石垣を見つけた。

「あっ、これだ。父さんのいつていたやつ」

石垣の四角い石の一つが、ごろんと池の底に落ちていた。石は一辺が三十センチもある。ユウヤが、その石の収まっていた場所を懐中電灯で照らした。

「あるよ、大きな穴がある」

大きな穴の周りは石垣が崩れ、あやしい穴が三つ、四つ開いていた。心臓が、どくん、どくと音を立てた。もし、やつがいるならここしかない。

「やるか！」

「うん」

僕たちは、仕掛けのついた竹の棒をつまむように持ち、膝について池をのぞいた。懐中電灯で穴を照らしながら、棒の先のミミズを穴に差し入れる。ウナギがいれば、ここでゴンゴンとアタリが来るはずだ。

「……」

しかし、穴の中からは、何の反応もなかった。横目でユウヤを見ると、ユウヤも首を振り、反応はないと伝えてきた。

（じゃあ、次の穴だ）

そのまま移動し、次の穴へ…。そのときだった。

「来たっ！」

慌てて頭を上げると、ユウヤの手先が揺れていた。

ゴン、ゴン。

離れていても、竹の棒が動いているのが分かる。ウナギがエサを食っているのだ。ユウヤは緊張した

顔で竹の棒を抜き、右手の甲にタコ糸を巻きつけた。

「くわえてる？」

「うん、くわえてる。ヒロキ、両手で引つ張るから、灯りを頼む」

ユウヤはゆつくりと息を整えると、腕を真っ直ぐに伸ばした。糸がぴんと張り、ユウヤの手がさらにゴン、ゴンと動いた。

（もうウナギは、針を飲みこんでいるはずだ）

ユウヤは、一気に糸を引つ張った。

「おおおっ」

穴からウナギの頭がぬっと出た。大きさは、僕のゲンコツほどだ。釣られまいと、左右に首を振っている。

「うわあ、でかい」

さらにユウヤが引つ張ると、ウナギは四十センチほど胴体をさらした。どう見ても、僕の腕より太かった。

「だめだ、抜けない！ 引きもどされる」

ユウヤにしては珍しく、動揺した声だった。

「抜けないって…」

「こいつ、重いし、力が強すぎる。くそー、穴に潜られたらおしまいだ。無理やり引くしかないのかあ…」



ユウヤと大ウナギのつな引きは続いた。おそらくウナギは、横穴に対して真上に引き上げられているので、長い体を曲げて踏ん張っているのだ。石垣の穴からは、泥煙がもくもくと出ていた。僕は、どうしていいのかわからず、ただただ、ユウヤの姿を見守った。

「うううっ、くうううっ…」

ウナギが、少しずつ穴に入っていく。

「大丈夫か？」

「ちくしょう、まっすぐ向こうに引けば抜けるのに、腕の長さが足りない」

ウナギとは、こんなに力が強いものなのか。

ぐぐっ、ぐぐつとウナギが後ずさり、ついにユウヤが音を上げた。

「ごめん、もうあきらめる…」

その言葉を聞いて、僕の体が反射的に動いた。

「ユウヤ、貸して！」

僕は、一直線に伸びた糸をからめるようにして持つと、糸を張ったまま池に飛びこんだ。そして、力をこめて糸を引いた。

ぐぐんっ、ぐぐんっつと、ウナギの抵抗が手に伝わる。

「大丈夫、まだ体は出てる」

懐中電灯を持ったユウヤの声がした。

(よし！)

腕の力に限界を感じた僕は、糸を持った手を腰に抱え、一歩ずつ後ずさりをした。ぐぐんっ、ぐぐんっ。

「出た、出た。いいぞ、いいぞ。ヒロキ、ウナギが出てきた」

もう少し、もう少し。

「ヒロキ、あとちょっとだ」

次の瞬間、ズルンツツという感触が手に伝わり、糸が軽くなった。

(やったー)

ついに僕たちは、大ウナギを穴から引きずり出したのだ。

それからもウナギは大暴れを続けたが、穴に潜られなければ大丈夫だった。しばらくすると、疲れ果てたのかウナギの動きが鈍くなった。そこで僕たちは、ウナギを衣装ケースに押しこんだ。

「うわっ、でかい！ でかすぎる」

「こらっ、大人しくしろ！」

気がつけば、ユウヤも池の中だった。衣装ケースに僕がウナギを入れるたび、すばやくふたをするのだが、ウナギは器用に尻尾からはい出してしまふのだ。

「もう一回！」

「よし、はいった！」

ケースのふたがしつかりと閉じられた。これでもう、僕たちの完全勝利だった。しばらくウナギは、ゴンゴンとケースに頭をぶつけて暴れていたが、やがて観念したのか動かなくなった。

僕たちを見下ろす空は、紺から黒へと色を変えていた。その分、星は輝きを増し、街灯には相変わらずコウモリが飛んでいた。おぼけ池は、再び静寂を取りもどしていた。

僕たちは、トンネルの入り口に腰を下ろし、ぐったりとしていた。弾けるような興奮も、震えるような感動も、ついさっきのことなのに、過ぎ去ったことのように思えた。

「釣っちゃったんだよなあ……」

「うん、釣っちゃったんだ……」

二人とも、魂が抜けたようだった。あまりにも大それたことをしでかすと、素直に喜べないものなのかもしれない。

「それにしても、ユウヤはすげえや。本当に大ウナギを釣っちゃうんだからな」

「何いってんだよ。ヒロキが池に飛びこんでくれなかったら、ウナギはまだ穴の中だ。あいつは、二人で釣ったんだよ」

「そうかなあ」

素晴らしいながらも、素直に喜べた。釣りを始めるとき、僕たちは『勝負』を口にしたが、これは二人の勝負ではなく、ウナギと僕たちの勝負だった。僕たちは、それに勝ったのだ。

衣装ケースに透けるウナギの影を見て、ユウヤがむふふと笑った。

「ねえ、もう一回、見てみない？」

「いいね、いいね」

僕たちは、衣装ケースに歩み寄り、静かにふたを開けた。ウナギはケースの中で体をしの字に曲げ、大きく息をしていた。

はふっ、はふっ。

息をするたび、ウナギのエラがふくらんだ。ユウヤは手を広げると、ウナギの上に当て、その長さを測った。

「一、二、三、四……。八十五センチってところだな」

一メートルには足らなかったが、十分な迫力があつた。

「それにしても太いよなあ」

「どおりで、重かったわけだよ」

それから僕たちは、そつとウナギをなでてみた。

「ううっ、ぬるぬるしてる」

ウナギがぬるぬるしていることは知っていたが、これほどとは思わなかった。こいつを素手で持つことなど不可能だ。

「うへへっ、気持ちいい」

「すごいよ、この太さ。指が回らない」

しかし、調子に乗ってさわりすぎたのが失敗だった。大ウナギは尻尾の先端をグイッと伸ばし、立ち上がるように脱走を試みた。

「やっべー」

とっさに手を伸ばしたが、ぬるぬるの体はそれをすり抜けた。そしてコンクリートの地面に転がった。

「あつ、こらー！」  
ユウヤがウナギに乗りかかるようにして押さえつけた。しかし、力の強いウナギは、ユウヤの体重な

どもものともせず、ぐいぐいと前に進んでいく。その先には、池があった。

「こらっ、止まれ！」  
足で通せんぼしても、ケースのふたで通せんぼしても無駄だった。このままでは逃げられる。僕たちは足でウナギを蹴って、池から遠ざけた。

そのときだった。大ウナギはヘビのように身をくねらせ、いきなり水路の方へ向きを変えた。そして、そのまま……。

「あああ……」

うす暗い堰の上に、一瞬、大ウナギの白い体が横たわった。そして、次の瞬間、大ウナギの姿は闇の中へと消えていった。

ざわざわざわ、ざわざわざわ。

堰を落ちる水の音だけが、とぎれなく続いた。

僕は、がつくりと肩を落とした。そして、どこかにまだ、あいつがいるのではと、懐中電灯で池の中を何度も照らした。しかし、大ウナギの黒い影を見ることは二度となかった。

ユウヤがおぼけ池を見ながら、ひとり言のようにいった。

「まっ、いいか」

「いいかって、いいわけないじゃん。あんなに苦労したんだぜ」

それを聞いて、ユウヤがくすくすと笑った。

「苦労したって？ よくいうよ。少なくとも僕は、楽しいことばかりだったよ」

ユウヤのいうとおりだった。この一か月、おぼけ池に通ったことも、トンネルを探検したことも、ウナギを釣り上げたことも、全部楽しいことばかりだった。気持ちの悪いミミズを針に刺したことも、池に飛びこんだことも、今にして思えば、やはり楽しいことだった。

「いわれてみれば、その通りだな」

ユウヤは、さらにこういった。

「ねえ、ヒロキ。あいつ、どっちに逃げたと思う？」

「どっちって？」

「堰の上か？ それとも下か？ だってさ、この水路を下ったんなら、海に行けるってことだよ」

確かに、ここにとどまるか、海に向かうかは大きな違いだ。しかし、どちらに落ちたのかは分からない

かった。

「それがさ、よく見えなかったんだよなあ」

ユウヤはしばらく堰を見つめ、ため息をつくようにこういった。

「ま、いいか」

(ま、いいか…) さつきと同じ言葉だった。

「ユウヤ、何でも『ま、いいか』なんだな」

「だってさ、おばけ池に残るか、海へ向かうのかは、あいつが決めることだもん。どっちでもいいよ。それにさ、これで余計な心配がなくなった」

「余計な心配？」

「だって、テレビとか新聞とか、そんな騒ぎになったらめんどくさいじゃん」

釣りをする前には、そんなことも考えてはいたが…。僕は素直な気持ちで答えた。

「そうだな、そんなの、めんどくさいだけだな」

晴れ晴れとした気分だった。

「さあ、帰ろうか」

こうして、僕とユウヤのウナギ釣りは終わった。

せっかく釣った大ウナギには逃げられてしまったが、ウナギなんか、また釣ればいい。このおばけ池は、海につながっているのだから、ウナギはまだまだいるはずだ。

空っぽの衣装ケースを持つユウヤに、僕はいった。

「なあ、ユウヤ。夏休みが終わったら、そろそろ学校へ来ないか？」

「何で？」

「そしたら、もっとお前と遊べるし」

「へへへっ」

「何がおかしいんだよ」

「だって、学校行ってなくても、ずっと遊んでるし。どうせ、明日も遊ぶんだろ」

僕は、心の中で答えた。

(ま、いいか…)

学校へ行くか行かないかなんて、どっちでもいいし、そんなのはユウヤが決めることなのだ。

新学期、こんなうわさを教室で聞いた。

「おばけ池の子どものおばけ、二人に増えたらしいぜ」

おばけがもっと増えればいい。面白いことは足もとに転がっているのだから。

(阿部夏丸)

『大発見は足もとに』では、ヒロキとユウヤの二人は、おぼけ池のウナギが二千キロも離れたマリアナ諸島沖で生まれて、仁の川をさかのぼり、さらに一里川を上って「おぼけ池」までやってきたのだらうということに気付きました。ウナギは、森と里と海が、川で一つにむすばれてつながないと、生きていけません。この森と里と川と海のつながりのことを「森里川海のつながり」と言います。

この森里川海のつながりは、ウナギだけでなく、実は私たち人間にとっても大切なものです。

ここからは、この読本を企画した専門家の先生たちが、日本の森里川海やそこから生ずる生き物のこと、私たち人間にも「森里川海のつながり」が大切なことについて、紹介しています。ぜひ、読んでみてください。

## 健康な「森と里と川と海」は、そしてそれらのつながりは、なぜ私たちにとって大切なのか？

「森と里と川と海につながり」については、本書中の物語の子どもたちの体験や、コラムで述べられている文章から、皆さんにも、その大切さをたくさん感じてもらえるのではないかと思います。

これからお話しすることは、私が実際に体験した、あるいは体験していることです。その実体験にそって「森と里と川と海」のつながりの大切さをお話したいと思っています。

### 雨を湛え生き物を育む上流の森

数年前の六月のはじめ、私は、学生たちといっしょに、標高が八〇〇メートルほどの、菅津とよばれる鳥取県の森の中にいました。そこに棲んでいるモモンガなどの野生動物の調査のためです。

森の真ん中あたりには、くぼんで、下に小石がびっしりと並んでいる水たまりがありました。朝一番にそこで学生たちと、ある動物を採集しました。アカハライモリです。

幅一・五メートル、長さ四メートルくらいのその水たまりでは、澄み切った水の中をたくさんアカハライモリが餌でも探すかのようにゆつくり歩き、ときどき雄が尾を揺らして雌に求愛していました。採集した個体については、雌雄の区別や体長、腹模様などを記録するのです。

しばらくすると学生たちの声が聞こえました。「先生、大きな緑色のカエルがいます！」とか「先生、茶色なへビがいます！」とか…。行ってみると確かにかなり大きなモリアオガエルが水から突き出た石の上にとっかかりと座っていました。岸辺の土の斜面には、体をSの字にく

ねらせながら斜面を登ろうとするジムグリがいました。私は、学生たちを集めて、それらの動物たちを手に取り、「名前の由来」や「今何をしているのか」を、それぞれの動物たちの習性を交えて自慢げに話しました。学生たちも興味津々、私への尊敬の気持ちの顔いっぱいにあらわして(?)聞いていました。

さて、その長細い水たまりの一番下の端では、石の間を通って水がちよろちよろ流れ出し、その水は、幅が二メートルくらいの小さな谷川へと流れ込んでいました。水たまりでの調査が終わるとわれわれは、谷川に沿って続く山道を歩いて下りました。下るにつれて谷川はだんだんと水かさが増していきました。森のいろいろな場所から水が流れ込んでくるからです。

やがて、森の木々が途切れ、平地で開けた場所に出ました。谷川は広く緩やかになり、「ここで遊んだら面白いぞ！」とわれわれを誘っているかのように見えました。そう誘われるとわれわれも遊ぶしかありません。でも、遊びの間にも調査です。そう、そこは毎回調査地として使う、川の上流に棲む生き物たちを調べるにはもってこいの場所だったのです。



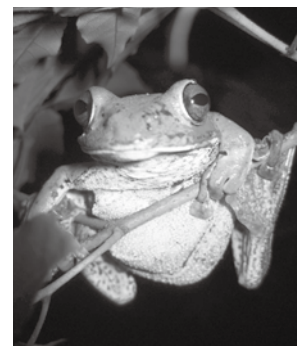
木に架けた巣箱には、どんな生き物が!?

ます。調査のときはいつもそうです。  
 おいしい空気、心地よい水の音を聞きながら食べる  
 カレーライスは、また格別です。  
 そして、この森の木々や草が放出する酸素によって  
 人類は生きています。今これを読んでいる君もその  
 酸素があるから生きていられるのです。君が学校の中に

さまざまな水生昆虫（カゲロウ、カワゲラ、トビケラ  
 などの幼虫が学生たちの網に入り、ときには魚（タカハ  
 ヤ）やサンショウウオ（ブチサンショウウオの幼生）が見つ  
 かることもありました。以前私はその場所で、岸辺の石を



森の水たまりは  
アカハライモリの棲みか



学生が真っ先に見つけた  
大きなモリアオガエル

人類はこうして上流からもたらされる水を飲み、水  
 で米や野菜などを育てて食べ、その一部を家畜に与えて  
 肉を得て生きているのです。森からの水がなかったら…  
 君たちも私も生きることができないのです。

午後は森に戻って二ホンモンガの調査です。  
 間伐され、よく手入れされた杉林と、それを囲むよ  
 うに生い茂るミズナラやブナやイヌシデの自然林を歩く  
 と、枯葉などが積もってふかふかになった地面の感触が  
 気持ちよく足に伝わってきます。森に降った雨は、まず  
 こんな地面にしみ込み、地中をゆっくりと下がっていっ  
 てアカハライモリがいた水たまりをつくったり、小さな  
 谷川をつくったり、やがて集まりあって広い谷川をつく  
 ることとなります。それが川の一番の上流というわけだ  
 す。こういう水は、地中や谷川を通る間に、汚れの元にな  
 る物質がろ過され、適度な栄養を含んだきれいな水にな  
 ります。

いるときも、家にいるときも、友達と地下鉄のホームに  
 いるときも…です。

歩くカワネズミを見たこともありましたが。感激しました。  
 溪流釣りを楽しむ人たちにもときどき出合いました。  
 谷川の調査が終わったら砂でおおわれている岸辺で、  
 みんなでレトルトカレーを炊き立てのご飯にかけて食べ





果箱にいた生き物は果たして…



芦津の森のシンボル、  
モモンガが利用していました！



山から下りたら、公民館の前で楽しい食事

### おいしい食事は森の恵み

調査が終わったなら、車で一〇分ほど山道を下り、窓から明かりがもれる家もちらほら見える芦津集落に到着します。その日は集落の公民館で宿泊です。

学生たちはみんな、調査で腹へこです。みんな、調査のときの恒例になっている「バーベキュー」を楽しみにしていました。公民館の前の庭で、集落の人たちと一緒にバーベキューパーティーをするのです。

野菜はすべて地元でとれた（森からの水で育てた）

カイナ？ 傍らで聞いている私は思いました。

朝は学生みんなで朝食をつくり（実習での朝食は野菜やツナやチーズを、その場で挟んでつくるサンドイッチとコーヒークオレンジジュースと決まっています。私の好みです）、食事を終えると、午前中の、アカネズミとヒメネズミの調査に出発します。それが実習の最後のメニューで、それが終わると、バスに乗って森と集落を後にします。大学へ帰るのです。

やがてバスは、中央車線があるアスファルトの広い道に出ます。信号機もガソリンスタンドもホームセンターも見えてきます。バスが川沿いを走るときは川の様子もよく見えます。川は広さと深さを増し、ところどころ、兩岸にコンクリートの壁がある川へと変わっていきます。家の数も増え、景観は明らかに、町へと変わっていきます。家や店などの建物には、全部ではありませんが森の木が使われています。これも森の恵みです。

バスが川が見えない場所を走っているときでも、町の中心には川があります。そして町の周辺に広がる田んぼや畑、果樹園（鳥取県の名産には梨や柿などがあります）

里山の幸です。肉は、集落の下の町のスーパーで買ってきた牛や豚の肉です。ときには山で捕れたシカやイノシシの肉、川で捕った魚もメニューにのぼります。森の木々でつくった炭で焼いて食べるのです。うまい。

学生たちと集落の人たちはいくつかのテーブルに交ざって座り、それぞれの話題に花を咲かせています。集落の人たちが学生たちに聞いています。「今日はモモンガは何匹見えた？」「君は何県から来た？」「この村に嫁に来るか、若いイケメンの男子もいるぞ」（ホンマ

には、川から、樋門を通して引き入れられた水が使われます。森からの水によって、人の食べ物も育てられるのです。ちなみに芦津の森からの水などを集めてどんどん大きくなり海へとそそぐ川は「三代川」とよばれています。バスは無事、大学に到着し、そこで解散です。「レポートは必ず締め切りまでに提出するように」、「Twitterのチェックは忘れてもレポートは忘れるな」。私が得意とする決めゼリフです。

### 上流の森に守られている街

大学の近くの川は、中流から下流の中間ぐらいの川ですが、私は河川敷で水辺の動物たち、とくに絶滅が心配されている動物たちを調べています。それらの動物たちは今から五〇年前には、里の動物として、そこかしこに見られたのですが、護岸がコンクリートの壁になったり、河川敷がグラウンドになったりして棲みかが減少し、数も減ってしまったのです。

昨年（二〇一六年）の夏は、最大級の台風がやってきて大雨が降り、川の水位が上がリ、私が調査地になっている河川敷も深い水に浸かりました。私は河川敷の細

流やワンド、カヤ原で生きているスナガツメやメダカ、カヤネズミたちのことが心配でたまりませんでした。

それでも今はまだ、千代川の上流の森に生きている植物たちのおかげで、大雨が降っても、山から土砂が流されて濁流になったり、山に降った水が一度に川に出ていき人間に大きな災害をもたらす洪水になったりすることはほとんどありません。森には地面の土砂を保つ力や水を貯めておく力があるのです。

ちなみに、二〇〇〇年には、日本の森林が人間に与えている利益（一年間分）をお金で示したときの金額を林野庁が計算していました。その額はなんと約七五兆円でした。その利益の中には保水機能や土砂流出防止機能、水の浄化、酸素の放出などが入っていました。それは「利益」というより、われわれが生きていくためにどうしても必要なものです。それがなければ人間は生きてはいけないのです。

さて、話は川の下流の終わり、海へと流れ出る河口付近の出来事になります。私は、よく千代川が海へつながる鳥取港に行きます。正確に言つと鳥取港の周辺にあ

ンプー容器、缶なども含まれています。川を流れてきて浜辺に漂着したのです。

これらのゴミを川に捨てたのは、もちろん二ホンモンガではありません。カヤネズミでもありません。上流から中流、下流に住んでいる人間が捨てたのです。そこで私は思うのです。「川は海とつながっている」、「川は人々の生活すべてと切っても切り離せない」、「なのに、こんなもん、何で捨てるんだー」。最近、こういったゴミが海底に沈んで海の生物の生息場所を奪ったり、プラスチックのゴミが小さな粉（マイクロプラスチック）になって、有害物質を吸着したまま魚類やそれを食べる鳥類やクジラ類の体内に蓄積され、動物たちの寿命を縮めたりしていることが分かりつつあります。

本来、森がある上流から海へと流れ着いた水には、魚や貝、海藻の栄養になるミネラルなどの栄養分が含まれています。だからよく言われるのです、「森は海の恋人」と。豊かな森と海がつながっているからこそ、われわれは魚や牡蠣や海藻などの海産物を食べることができ

るのです。でも、漂着「ゴミ」のやうな形で上流、中流、下流と

る砂浜です。それは鳥取県の名所、鳥取砂丘の一部でもあります。私はその浜辺を「トットリスナガニ砂浜」（略してトリスナ浜）とよんでいます。

トリスナ浜を歩くと、文字通りスナガニがまず迎えてくれます。これまた正確に言つと、スナガニが掘った巣穴が迎えてくれます。スナガニは基本的には夜行性で、暗くならないと地上へは出てこないのです。でもときどき、おっちょこちょい（？）のスナガニが、昼間でも巣穴から出て、ささっーと歩いて別の穴に入っていくのを見ることがあります。他の動物としては、ヒメハマトビムシやハネカクシ、オオハサミムシなどが、浜辺に打ち上げられた海藻のまわりでよく見られます。気の毒なのは浜で死んでいるクラゲや魚、貝殻にくっついたフジツボです。それを狙つてか、チドリやトンビ、季節によってはユリカモメが波打ち際を歩いているのが見えます。

### 河口の砂浜の悲しい光景

問題はここからです。砂浜では、生物や死物よりまずとたくさん目にするものがあります。「漂着「ゴミ」とよばれるものです。ガスライターやペットボトル、シヤ

海とのつながりを知ることには悲しいことです。

### 健康な森里川海のつながりが豊かな暮らしを支えてくれます

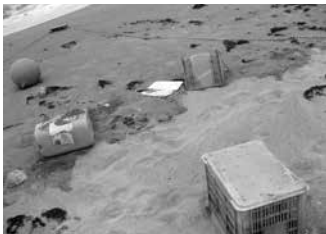
上流から下流にかけての森・里・川・海を、学問では「流域」とよんだりもします。そして、私が最後に皆さんに伝えたいことは次のようなことです。

われわれ人間は、どこに住んでいようが（山村の家であっても駅前マンションであっても）、健康な「流域」の恵み無しには生きてはいけません。

健康な流域とは、森・里・川・海で生きる生物（ヒ



いつも砂浜で出迎えてくれるスナガニ



残念ながら、たくさんの漂着ゴミがあります





学生たちの砂浜の生き物調査と清掃活動です

トを含む動物や植物、菌類、細菌類などが、長い年月を経て築き上げてきた、食物連鎖や共生などのつながりがあるような流域です。そのような流域があればこそ、私たちは、呼吸したり、野菜や肉を食べたりして、いつぼうで異常気象による河川の氾濫、土砂崩れといった大

な災害に頻繁に襲われることなく、生きていけるのです。研究者をはじめとして多くの人たちが、ニホンモロングヤアカハライモリ、スナヤツメ、メダカ、カヤネズミといった絶滅が心配される生物たちの生息地を守ろうとするのは、これらの生物たちも、健康な流域、「森、里、川、海」を支えてくれる大切な生物だからです。

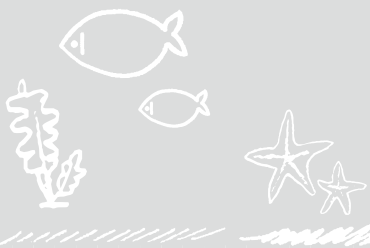
このことは、これからさらに技術が進歩して、たとえば高度なAIやSNSなどのIoTシステムができてきても、変わることはない事実です。

どうか皆さん、今皆さんが住んでいる場所の、身近な生き物のことを知ってください。その生き物はどんなに小さくても、ヒトと同じように、栄養を取り込んで、身を守って、繁殖して、懸命に暮らしています。そして次に、皆さんが暮らしている場所を取り巻く流域（森・里・川・海）の生き物について、できれば会いに出かけ行行って、知って、大切に思ってください。

「健康な森と里と川と海は、そしてそれらのつながりは、なぜ私たちにとって大切なのか？」

皆さん、わかっていたただけでしたでしょうか。（小林 朋道）

## 先生たちから子どもたちへ コラム森・里・川・海



## 日本は「森林(もり)の国」

私は「森」はいつも、「森林(もり)」と書くことにしています。森と、林で、できているからです。

その森林は、適度の温度と降水に恵まれた地域のみに生育します。人類が発展するにしたがって田畑や牧草地などの農業用地や宅地・工場用地などに変えられてきていて、今では地球上の陸地面積のうち森林が占める割合は、三〇パーセントに過ぎません。陸地面積は地球表面積の三分の一ですから、森林面積は地球表面積の一割に過ぎませんね。このわずかに一割に過ぎない森林に、地球上の有機物の九割があるといわれています。つまり「森林は、多量の炭素(C)を地球上に貯留している」ことになるのです。したがって、森林が、みすぼらしくなったり少なくなったりすると、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)やメタンガス(CH<sub>4</sub>)など、地球温暖化ガスを大気中に放出し、地球環境の悪化の原因になるのです。

した。森林は、日本人の活力の源でした。しかし、戦後の燃料革命や肥料革命、外国産木材による代替材の普及などによって我が国の森林の経済的価値はすっかり低下し、林業も衰退してきていました。

一方、地球上では、過度に石油や石灰などに依存してきた文明には限界があり、地球環境問題の上からも、生態系を損ねないエネルギーや物質の利用による「持続可能な循環型社会」を創り出すことが世界の人々の願いとなつてきています。そして今、人類には、「発展途上社会から成熟社会」への転換が求められています。われわれ日本人は、人口の減少や高齢化など大きな課題を背負っており、生き方そのものの価値観や社会のあり方を問う必要が高まり、森林との付き合い方も改めて考え直す時期にきていると思えます。『森林と共に生きるのか?』、それとも『森林の外で生きるのか?』が問われていると考えています。

日本には、三七〇〇万ヘクターという狭い国土に一億三千万の人が生活するため、平野部のほとんどは都市や農地などに利用されていますが、国土の六七パーセントにあたる二五〇〇万ヘクターは森林に覆われて

日本は、温暖で多雨なモンスーン気候帯に属するため適度の温度と適量の降水に恵まれ、植物の生育に適し、森林が良く発達します。北海道や中部山岳地帯の高山地など気温が低すぎる場所を除けば、人為などによる過度の破壊を受けなければほぼ全域で森林が発達します。北海道や中部地方などの内陸部などは、冬には寒さが厳しいですが、夏には気温が上がって植物が盛んに成長します。

このように日本は、まさしくどこにでも木が生育しやすい「森林の国」であり、二世紀の現在にあつても国土の六七パーセントを森林が占めている国なのです。日本における陸上の最大の「自然資源」は、森林であるとも言えます。日本人は、常に身の回りにあつた森林から、エネルギー材、建築資材、山菜や果実などの食糧、有機物肥料など日常生活や産業に必要なものを得てきま

います。しかし、それらの森林のほとんどは、日本人の長い歴史の中で、開発、利用、改造されたものです。日本の現状の林種別森林の比率は、人手の影響がほとんど残っていない天然林が二九パーセント、人手の影響が強く残っている天然生林が二四パーセント、人工林が四一パーセント、竹林などが六パーセントと推計されています。これらの森林に対する国民の強い想いは「緑と水」の関係性のつくり直しにとどまらず、原発事故による「再生可能エネルギー」への期待の高まりの中で、木質バイオマスエネルギーが注目され、新たな資源としての期待も高まっています。しかしながら、世界の過去の文明が木材資源の「使い過ぎ」によって滅びていった失敗を、他にエネルギー資源の乏しい日本が絶対に犯してはなりません。森林が衰えると、川が暴れ、里が荒れ、海が痩せ衰えます。このような愚行をもつ繰り返さないためにも、森林の現況を詳細に把握し、森林の「お手入れ」をして、「賢く使つてゆくこと」が必要なのです。今日は皆さんに「小さな時からそれを理解してもらいたい」と、あえて難しい言葉のまま書いていたことをわかつて下さい。

(竹内典之)

伝説の巨人「ダイダラボッチ」と里山の子ども暮らこ

ダイダラボッチって聞いたことあるかい？ —富士山に腰かけて、天竜川でふんどしを洗い、ヨイシヨと手をついたら浜名湖ができた— そんな巨人の名前だ。似たような巨人伝説が全国のあちこちであるよ。映画『もののけ姫』にも出てきたね。共通していることは「おおらかで、自然を愛し、気はやさしくて力持ち」な巨人。長野県に、この巨人の名前からとった子ども家があるんだ。子どもの家？ 興味あるよね。どんな家なのか、ちよつとのぞいてみよう。

長野県秦阜村。人口一七〇〇人の小さな山村だ。その村のこれまた小さな集落にその家はある。ここは、全国から集まった子ども（二〇名ほど）が暮らす山村留学の家。一年間の共同生活を営みながら、村の小・中学校へと通う。子どもが食事をつくり、風呂を沸かし、掃除や洗濯など、生活の一切を自ら手がけている。暮らして

中ではケンカは当たり前。困ったことは多数決を用いなくて、納得のいくまで話し合って解決する。

ストーブや風呂の燃料はすべて薪。その薪も村の里山に入り、地元のお年寄りといっしょに間伐作業をして確保する。田んぼや畑でイネや野菜を育て食材を確保し、手づくりの登り窯で焼いた食器でご飯を食べる。里山の暮らしから多くのことを学ぶから、ここは『暮らしの学校』だいらぼっち』と呼ばれているんだ。

子どもの毎日の仕事は、薪割りとお風呂焚き。五右衛門風呂を前にして、新聞紙と焚きつけをどっ配置すればよいか、焚きつけ後の薪はどのくらいの方がよいか、空気は送りっぱなしでよいのか。「熾き」をつくるのがコツであるとかなど、子どもは風呂焚きを通して、どいう順序で準備をするのが一番よいかを自然と考えるようになっていく。そうすると、ナタやオノの刃を前もつ

て研いでおいたほうが効率的なことや、軍手や皮手袋、火バサミや灰を出す道具をしっかりりとそろえておく必要性に気づく。里山の暮らしは、こうした「段取り」を学ぶことができるんだね。

もちろん、いいことばかりじゃない。ある日、こんなことがあった。学校の帰り道に子どもが田んぼの水路に転がっていた石をどけて、水遊びをしたときのことだ。その夜、田んぼの持ち主の老人が血相を変えて怒鳴り込んできた。「どついつつもりだ。ちゃんと子どもに教えとけ！」子どもはなぜ怒られているかわからず、水路の石をどかしただけのことじゃないか、という顔をしている。スタッフが平謝りして「心事なきをえた後、子どもに切々と、「なぜあの老人が怒った」かを説いたんだ。この集落は、斜面にへばりつく水の少ない集落だ。しかし山の向こう側にある川の水源から、数キロメートルにわたる水路を作ってまで米作りにこだわった。その昔、途方もない水路建設に、集落全戸がお金と労力を出した。今も皆で維持管理している。集落に張り巡らされる細かな水路ごとに水が流れる時間が決まっている。この集落には水を確保する闘いの歴史があったんだ。

子どもも、ここまで説かれるとようやく理解した。自分がどかしたあの石は、転がっていたのでなく、わざわざ置いてあったのだということ。そして、その石が、老人の生活を支えているということ。こうやって、里山の暮らしの作法を身体で学んだね。

ちよつとだけしか紹介できなかったけれど、里山の暮らしはこんなにリアルな学びでいっぱい。どうだい？ おもしろそうだろう？ 子どもの家『だいだらぼっち』に、一度、行ってみたいと思わないか？ 里山において、きつと、おおらかで、自然を愛し、気はやさしくて力持ち、になれるよ！

(辻英之)



下校中に水路で遊ぶ子ども

## 日本にはたくさんの川がある

日本と世界の川で、サケ科のサーモンや、日本ではヤマメ・アマゴ、そしてアユを、六四歳の今も年間六〇日以上釣っている「アウトドアライター」から、日本の川の現状をお知らせします。

大小三万本の川が、この小さな日本列島にはあることを知っていますか？

しかしその中で、海から川、川から森へと川を溯つて子孫を残す行動が今もとれているサケやアユやウナギのような「降海・湖上型魚類」が大量に産卵をくりかえしている川は、アユではたった九〇本くらいしかないことはあまり知られていない事実です。

どうしてアユに注目して九〇本と調べたのかって？ それはアユが、日本の「川の国魚」ともいえるべき存在だと思つたからです。地球上の「アユベルト（その生息が多いところ）地帯」は、ベトナムから中国まで。その中

でも日本だけに、海産アユ、湖産アユ、琉球アユの三種がいて、いわばアユは、カナダにおけるサケのように、この日本を代表する「川の王様」なのです。

ではなぜ日本では、その「川の王様」がいる川が三万本の川のうち九〇本くらいしか失くなってしまったのか。それは、日本人が、自分たちヒトだけの繁栄のために、ダムや堰を造り続け、他の生き物の繁栄を考慮してこなかったからです。世界の他の国々も同じでした。

二〇世紀から二十一世紀に変わる時に、世界各国の政府は、「二〇世紀と同じスピードと思想で地球破壊をヒトだけが続けてはいけないのではないか」と考えました。二〇〇三年には、京都大学が同じ考え方を「森里海連環学」として提唱しました。皆さんが今日読んでいるこの『森里海大好き！』も、この「森里海連環学」がベースとなっていて、環境省が、「二十一世紀にはこの

考え方で日本の自然を回復させていこう」と決めたことを実行していくためのキーワードです。

同じ頃にカナダでは、ピクトリア大学のトム・ライムヘン教授が、「サケが産卵のために森へむかう秋に、クマがサケを川で捕つて森の中へ持って行って食べる」とによって、海の「窒素15」が森の木の中に入れられ、それが森の木の成長を助けている」ことを世界へむけて発表しました。そのためカナダでは、サケを森へむかわせるために、川を昔のような川にもどす「自然再生公共事業」が行なわれるようになりました。今では多くの国で同じように自然を再生するための公共事業が行なわれるようになっていきます。森は海を育てているし、海も森を育てていたことを、ヒトは知つたからです。

「森は海の恋人」といわれますが「海も森の恋人」であり、「川」は、それをつなぐキューピット（すなわち仲人）であつたというわけです。

こうしてヒトはようやく、「他の「生き物」のためにだけでなく、自分たちヒトのためにも、自然の力が最大限に生かされる地球であるべきだ」と、学べたのですね。二十一世紀には、日本の多くの子どもたちがそれを

理解し、「ヒトが地球に恩返しをできるようにしなければいぬ」と考えてくれると思っています。  
身近な川を歩いて、あなたもこんなことを考えてみてくれませんか？  
(天野 礼子)

トム・ライムヘン教授。ペイトウヒの木  
の幹から年輪を取り出し、サケが溯上している川の側の木の年輪と、そうではない木の年輪を比較し、サケが溯上している川の側の木の年輪は、溯上していない川の木の年輪よりも1.5倍以上成長していることを証明した。



## 陸に上がった魚は、今

え！ 私たちは陸に上がった魚？

海の中にはタイやヒラメなどのたくさん真骨魚類、サメやエイ類などの軟骨魚類がいます。タイもサメも魚です。私たち人間とタイの関係、タイとサメの関係、どちらがより近い親戚関係にあるでしょうか。なんと、海に暮らす魚どうしのタイとサメより、陸と海に分かれて暮らす人間とタイのほうがより近い親戚関係にあるのです。サメを魚と呼ぶなら、人間は、陸に上がった魚。そのものなのです。

### 水の惑星と生命の誕生

地球は「水の惑星」と呼ばれます。宇宙のほかの惑星にも生命が存在するか、今さかんに調べられています。その際、確かな手がかりになるのは水や氷の存在です。生命の誕生とその進化や維持にとって、水が必ず必要で

す。私たちが生きていくために水を必要とするのは、生命の誕生に深く関わるといえます。今、この水の惑星から水が消え始め、砂漠化が進み、多くの幼い命が失われる事態が進行しています。

### 海がなければ森も人も生きられない

地球の表面積の七一パーセント近くは海です。地球の水の九六パーセント以上は海水であり、私たちが必要とする真水は、氷を除くと全体のわずか〇・八パーセントほどに過ぎません。その水を生命の誕生以来、絶えず陸上の動植物や私たちに送り届け続けているのは、海なのです。海から蒸発した水蒸気は雨や雪となって大地を潤し、森を育みながら、私たちに飲み水を供給し、お米や野菜、家畜を育ててくれます。

### 命のふるさと海を汚し続ける人間

このように、水は私たちにとってなくてはならない存在です。地球上には、酸素がなくても生きていける生物はいますが、水なしに生きられる生物はいないのです。しかし、海辺に暮らす人々を除くと、大多数の人々は海から離れた陸に住み、海の存在やその恩恵を意識することはほとんどありません。それはかりか、日々の暮らしの中で生まれる排水や大量のゴミは最後には海に流れ、知らぬ間に海を大きく汚し、生態系を壊し続けているのです。最近の集中豪雨や大きな台風、さらには巨大な津波の襲来は、ひよっとすると海が私たち人間の行いに腹を立て、戒めているのかも知れません。

### 祖先を陸にいざなった岸辺の木々

私たちの祖先である魚はどのようにして陸に上がったきたのでしょうか。今から三億六千万年ほど前に、ユーステノプテロンという魚（写真1）が水際に住んでいました。その胸びれには私たちの手に備わる骨の要素が、腹びれには足の骨の要素が備わっていました。その魚たちは岸近くの海底を這うようにして暮らしていたと思わ

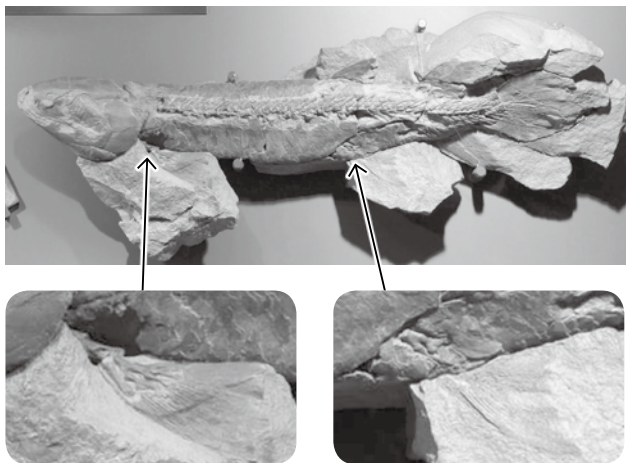


写真1 私たちの祖先にあたるユーステノプテロン。水際で隠れるようにして暮らし、胸びれや腹びれは手や足へと変化しつつあった。

画像提供：国立科学博物館

れます。ユーステノプテロンの暮らしを支えたのが、水際に生い茂った、地球上に最初に現れた木アークオプテリスでした。たくさん落ち葉が海の中の魚の餌となる生き物を育み、折れた枝や幹は隠れ家を提供しました。

私たちは、ずっと昔から、森と海が深くつながる中で命をつないできたのです。

### 「弱虫」のすすめ…遠い祖先は「弱虫」だった

当時の海には体長四、五メートルを超えるような巨大な魚が住み、一メートルにも満たない小型のユーステノプテロンは、水辺に隠れるように暮らしていたのです。そのように弱者だったからこそ、生きのびる道を求め、海での暮らしに見切りをつけて、新天地である陸に上る大冒険に踏み出したのでしよう。弱者から生まれたヒトは、今では陸上で一人勝ちの強者となり、環境に適応して生きる工夫を放棄し、環境を自分たちヒトだけの都合で大きく変えて、生き延びようとしています。本家の海の魚たちはどのように見ているのでしょうか。「絶滅への道をひたすら走る迷惑な生き物だ」との声が聞こえてきそうです。

### 祖先のふるさとへ続く水辺で遊ぶ

砂浜に続く水平線の向こうから上がる朝日、その先に沈む夕陽は、私たちに生きる力や明日への希望を与えて

### 森が海を育み、海が森を育む

水が海と陸の間をめぐり続け、海が森を、森は海を育み続けてきました。これからの地球になくはならない日本の知恵（価値観）として、世界が大きな関心と期待を寄せています。「The Forest is Longing for the Sea, the Sea is Longing for the Forest」は、世界共通のこれからの理念になりつつあります。日本に生まれた「森は海の恋人」運動（写真3）は、「豊かな森を育てると栄養豊かな水が生み出され、海の生き物を育む」との森と海の不可分のつながりを言い表したもので、それに続いて森から海までのいろいろなつながりを解き明かす「森里海連環学」の誕生を促し、さらに国（環境省）の国民運動「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトへとつながりました。これからの一〇年は、その流れを大きな本流にして、未来世代の幸せを日本で実現できるかどうかの節目といえます。（田中克）

てくれます。水辺は、私たちの遠いふるさとへの入り口ともいえる場所です。しかし、海から離れるばかりの間は、このような海辺を埋め立て、大きなコンクリートの壁を造って、ふるさとへ続く道をとぎしています。水辺は多くの海の生き物が育まれる命輝く場所です。世界中の子ども達は海辺で遊び、生きる知恵を学んでいます。水辺で遊び、生き物たちと話し合ってみましょう。きっと世界が広がります（写真2）。



写真2 有明海の干潟で遊び、自然とともに生きる知恵を学んだ子どもたち（2000年代：中尾勘悟氏提供）



写真3 2018年に30周年を迎える「森は海の恋人」植樹祭。最近では全国から1,500人前後の人々が集まる（岩手県一関市室根町）

## 自然体験は、どうして子どもに必要なのか？

少し理屈っぽい話からはじめますが、頑張つて読んでください。

生物はすべて、その生物が生活している環境に脳や体の性質が適応しています。たとえば、モグラは食虫類に属する動物で、土中に穴を掘って過ごし、ミミズなどの動物を餌にします。ですから、穴を効率的に掘れる形の手をもっていますし、穴の中を動くとき土との摩擦が起きにくいような筒状の体とピロロドのような体毛をもっています。脳については、視覚的に外の世界を探る目からの神経や視覚の情報を分析する神経系が脳内にはわずかしかが存在しません（あっても暗い穴の中では役には立たないからです）。その代わり、鼻からの匂いや体全体の毛が物に触れたとき生じる接触的情報や振動の情報を受けて分析する神経系は脳内で発達しています。

いっぽう、モグラと同じ食虫類で、モグラと同じ祖先で狩猟採集をしていたと考えられています（文明が発達し、ヒト自身が生息環境を大きく変えるようになったのはその歴史の中ではとても短い時間だったということになります）。ですから、現代人であっても、その脳や体は、自然の中での狩猟採集に適応した性質をもっていると考えられるのです。

では狩猟採集がうまく行えるためには脳や体はどのような性質をもっていればよいでしょうか。脳については、その性質の一つは「動物や植物などの習性・生態に興味を感じ、それを記憶しやすい」というものです。私は、自然教室を利用して、確かに子どもたちがそういう性質をもっていることを確かめました。また現在、アニメやゲームで人気が高いポケモンや、けものフレンズ、モンスターハンターなどは、生物の習性・生態が大事な情報になっていて、それを見抜いたり利用したりすることが魅力の源になっているように思えます。ヒトが「動物や植物などの習性・生態に興味を感じ、それを記憶しやすい」脳をもっていることをこれらのことは支持しています。

実際にヒトの脳内の生理的な活動を調べた研究では、

から分かれて進化してきたと考えられるカワネズミ（名前はネズミですが齧歯類ではありません）は、水辺に棲んでおり、川に潜って水中の昆虫やカニ、魚などを餌にしています。そういう生活に適応しているカワネズミは、水をはじく体毛や水がよく揺れる後ろ足をもっています。脳に関しても、水中を泳ぎ瞬時に方向転換できるような運動神経系や、鼻にある髭に当たったものを素早く認知するような神経系が発達していると考えられます。

つまり、進化の結果、モグラとカワネズミは、それぞれ土中生活と水辺生活に適した脳や体をもつようになっているということです。

さて、では私たちヒトはどうでしょうか。

ヒトは学名ではホモ・サピエンスとよばれる霊長類ですが、進化的に地球上に誕生したのは約二〇万年前です。そしてその二〇万年のうちの九割以上は、自然の中

脳内には、生物やその生息地に関する情報を分析する専用の神経系があることが分かっています。

では、そんな自然の分析に専門化した神経系をもっているホモ・サピエンスが自然に接し自然についての情報を脳内に取り込まなかつたらどうなるでしょうか。それはモグラを土に触れさせることなく育てたり、カワネズミを水に触れさせることなく育てたりした場合、どうなるかを考えれば参考になると思います。きっと、それぞれの動物の本来の力が発揮されないような脳や体をもった個体になるのではないのでしょうか。

当時の文部省委嘱調査「子どもの体験活動等に関するアンケート調査報告書」（一九九九年三月公表）によると、「自然体験が豊富な子どもほど、道徳観・正義感が身についている」ようです。私は、基本的には、道徳観や正義感、人が自分を生かしながら元気に生きていくうえでとても役に立つ、ホモ・サピエンス本来の性質だと思えます。

以上のことが、「自然体験が子どもに必要」な理由として、私が一番、声を大にして言いたかったことです。だから皆さんに、「ぜひもっと自然に触れてください」と言いたいのです。

（小林 朋道）

# ウナギとザリガニが教えてくれること

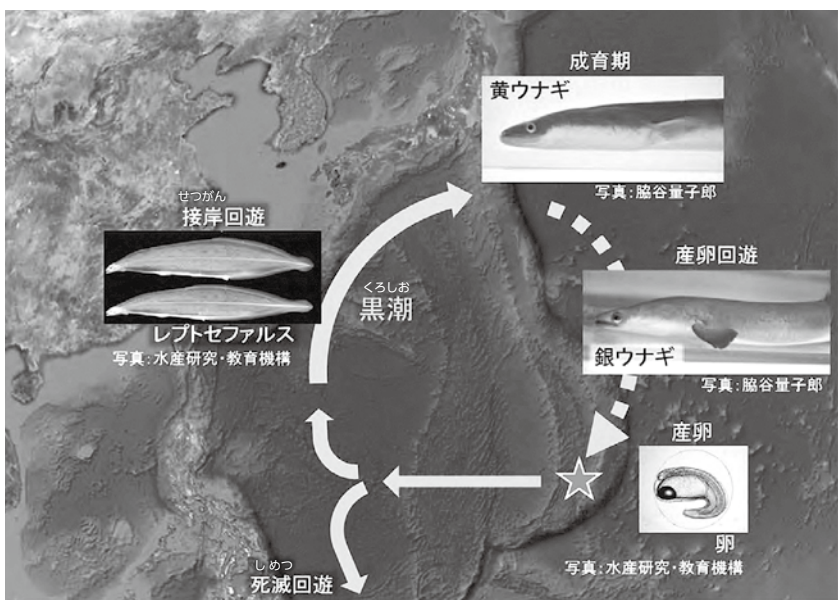
本書中の物語『大発見は足もとに』には、様々な生物名が出てきましたが、皆さんが実際に見たことのある種は、どのくらいいたでしょうか。いわば主人公ともいえるウナギは、多くの人は食べたことがあるかと思えます。でも、野生のウナギが川で泳いでいるのを見たことのある人は、ほとんどいないのではないでしょうか。

物語の中では、ヤツメウナギについてユウヤが「こじや、超絶滅危種なんだ」と言っていました。絶滅危種というのは、急速にその数や分布域が減るなどして、絶滅のおそれが高まってきている生物種のことを言います。そうした種の割合は年々増えてきており、日本では、ウナギを含めた汽水域（海と川の水が混ざるような水域）や淡水域に生息する魚類では、四割以上の種が絶滅危種となっています。

生物種に絶滅のおそれが生じるようになる要因には、

様々なものがあります。最大の要因としては、人間活動の影響でその生物のすみかが失われてしまうことや、その環境が悪化してしまうことが挙げられます。また、いくつかの種は、人間が過剰に捕獲や採取をしまい、数を急激に減らしてしまったものがあります。さらに、本来そこにいなかった生物を人間が持ち込んでしまい、その生物に食べられたり、すみかを奪われてしまったりしているものもあります。

物語に出てくるウナギ（ニホンウナギ）は、二〇一三年に絶滅危種としてリストアップされました。これは、推定生息数が、過去五〇年くらいに約九割も減少していることがわかったためです。本文中の注釈にも書いてありますが、ニホンウナギの生息は、まだ完全に解明されてはいません。ただ、本州の南二〇〇〇キロメートルにあるマリアナ海溝のような深海で産卵することが知



ニホンウナギの生活史（出典：『ニホンウナギの生息地保全の考え方』環境省）

られています。ふ化した稚魚（レプトセファルス）は、フィリピン、台湾、沖縄などを回って北上し、やや小さく透き通ったウナギ（通称シラスウナギ）となって本州・九州・四国の河川に到着し、餌が豊かで隠れ場所の多い生息地を求めて河川をさかのぼっていきます。その一部は河川から水路などを通じて田んぼやため池にも生息していましたが、物語ではそうしたウナギが描かれているのです。数年から十数年かけて淡水域の中で大きく育ったウナギ（通称黄ウナギ）は、再び川を下って海まで戻り（通称銀ウナギ）、その後、産卵場所である深海を目指して太平洋を南下していくものと考えられています。

ニホンウナギは、このように様々な環境を利用しているので、沿岸だけでなく沖合も含めた海洋と、河口から上流に至る河川、さらには田んぼやため池などの里地の各環境が、それぞれ好適な状態で維持されなければ、その生息数を減らしてしまうことになります。一部の河川では、ウナギなどのために、川をさかのぼれるような仕掛けを作ったり、隠れ場所を確保するために、川の中に瀬（浅い部分）や淵（深い部分）ができるような工夫も施されるようになってきています。また、ウナギの生



態も考えながら捕りすぎないようにすることも重要です。このため、養殖目的のシラスウナギの捕獲量を制限したり、産卵に向かう銀ウナギの捕獲をやめるような取組も始まっています。

私たちが、将来にわたって日本産の美味しいウナギを食へ続けることができるようになるためには、このように、川や海をできる限りウナギがすみやすい環境に戻しながら、自然の川に生息するウナギの数を増やしていかなければなりません。

一方で、ウナギの大好物として物語に登場したザリガニであれば、赤い色をしたアメリカザリガニを、きつと皆さんも近所の池などで見たことがあるのではないのでしょうか。アメリカザリガニは一九二七年にアメリカ合衆国から食用のウシガエルの餌として輸入された、もともと日本にはいなかった生物です。

本来そこには生息していなかった生物のうち、人の手によって持ち込まれた生物を外來生物と呼びますが、日本の自然に悪い影響を及ぼす外來生物がたくさんいます。アメリカザリガニも、ウナギにとって重要な餌となるときもあります。池や川の水の中にもともといた魚

や昆虫、水草などを食べたり傷つけたりすることで、日本在来のザリガニやその他の生物が減ってしまったり、すみづらくなることが知られています。

最近、公園の池やお堀の水をすべて抜いてヘドロや外來生物を捕獲して取り除く「かいぼり」という作業を行うところがあります。テレビや新聞でも紹介されていますが、この「かいぼり」によって美しい池の水がよみがえり、地域に昔からいた生物が元気を取り戻すなど、もともとの健全な自然が回復してきています。でも、元をただせば、そうした池やお堀にいた外來生物だって、誰かが放したためにそこで増えてしまったものなのです。家で飼っていた生物が大きくなって手に負えなくなり、飼えないからといって勝手に放してしまったのかもしれない。そうした自然のしくみをよく知り、それを阻

害しないようにすることが大切です。

絶滅危種もすめるような豊かな自然をできる限り取り戻す努力をすることも、在來の生物は本来のすみかからむやみに移動させず、外來生物は勝手に自然の中

に放してしまわないようにして下さい。

自然を理解し敬う気持ちに基づき、そんな私たちの行動が、きつと自然とともに豊かに生きていける、私たちの未来につながるのではないかと思います。(奥田直久)

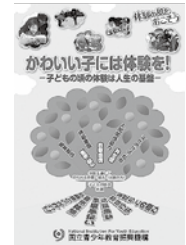


もともとはウシガエルの餌として輸入されたアメリカザリガニ



池をよみがえらせる「かいぼり」作業の様子

戦後七〇年以上を経た今、私たちの社会は驚くほどの繁栄をもたらしました。私たちはこれまで、便利で快適な生活を求め、それを実現し、欲しいものも手に入るようになりました。一方で、社会の急激な変化を経験してきた大人世代の人たちには、失われてしまった光景も目に浮かぶのではないのでしょうか。

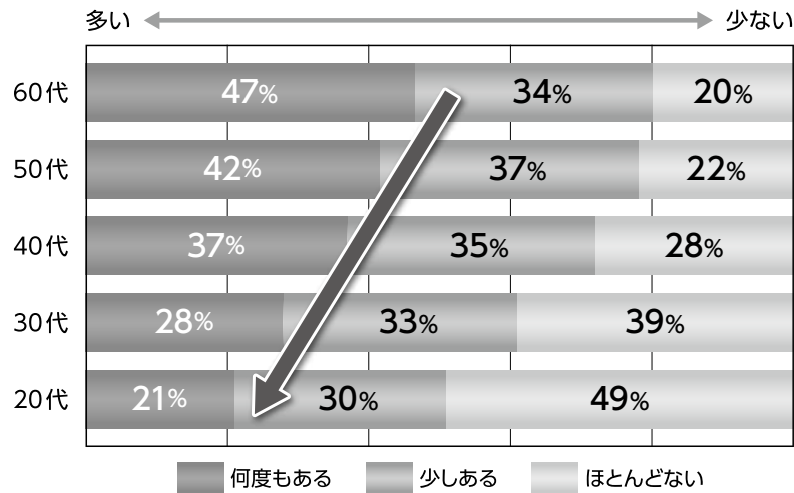


映画『ALWAYS 三丁目の夕日』が大ヒットしましたが、その失われた姿を懐かしみながら見入っていた人も多かったと思います。映画にあるとおり、当時は隣近所の人たちとの心の交流があたりまえのようになされ、また子どもたちは群れをなして遊んでいました。少子化の影響やゲーム機の普及などもあって、最近では子どもたちの遊ぶ姿は見かけなくなりました。調査結果の図にあるとおり、子どもたちの遊びが、年代が若くなるほど、少なくなっています。今の大人たちが少年時代を

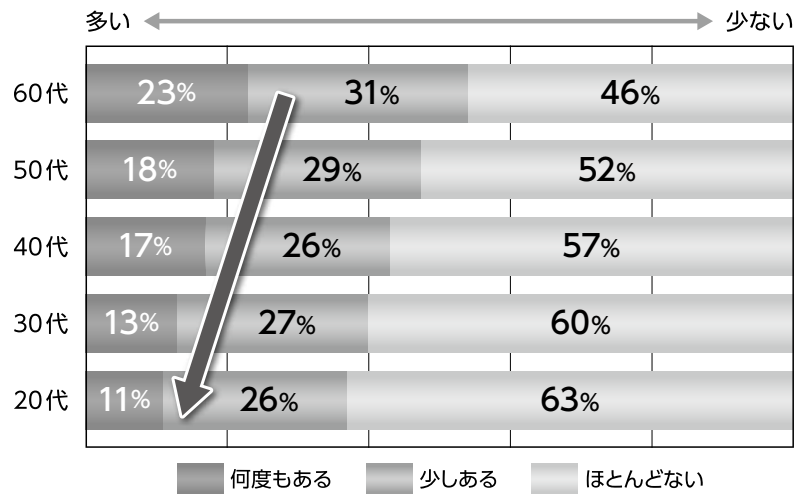
過ごした野原や空き地は姿を消し、あったとしてもそこには立ち入り禁止の看板が立ち、子どもたちの遊び場とは程遠い状況になっています。調査結果は、自然体験についても同様な傾向を示しています。こうした状況は子どもたちが作ったのではなく、私たち大人が作ってしまったのです。だとしたら、私たちが子ども時代に経験した環境を意図的に作り出していく必要があるのではないのでしょうか。

もちろん、当時とは社会環境が違います。同じことをしようとしても無理なことです。ですから、昔の状態に戻すのではなく、私たち大人たちが知恵を出し合い、新たな価値を創り出していく行動が必要なのです。子どもの頃の経験がその後の人生に影響を及ぼすことは、調査結果から明らかになっています。まずは、できるところから第一歩を踏み出すことが大切です。この『森里川海大好き！』が、こうした第一歩のきっかけ作りになることを願っています。  
(山本裕一)

小学校4～6年生の頃にすもうやおしくらまんじゅうをしたことの推移

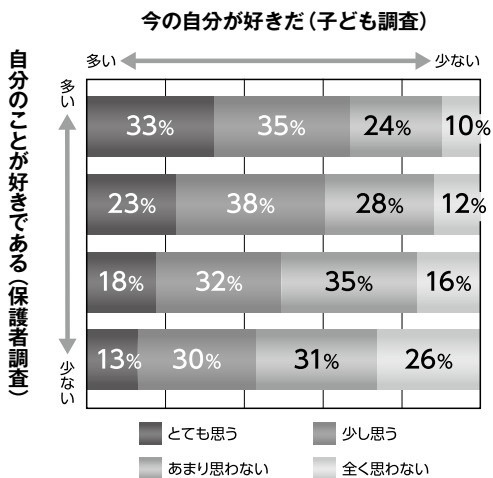
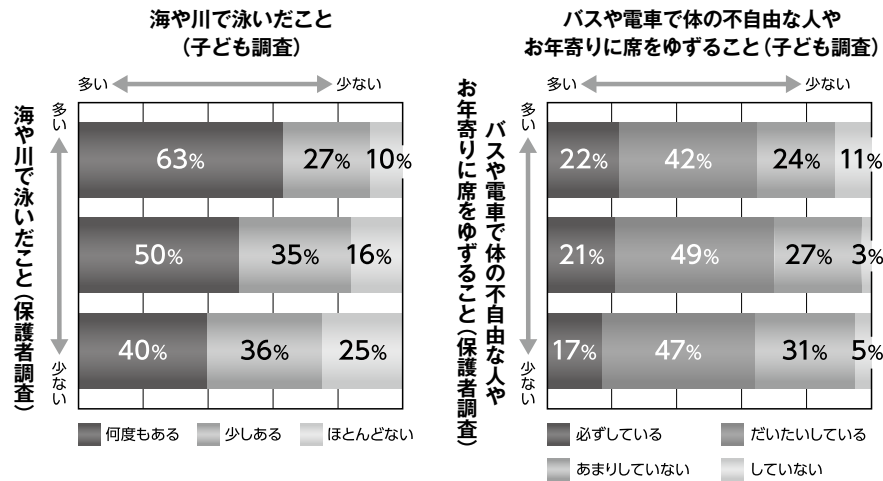


中学生の頃に海や川で貝を採ったり魚を釣ったりしたことの推移



出典：「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」(2010年度)

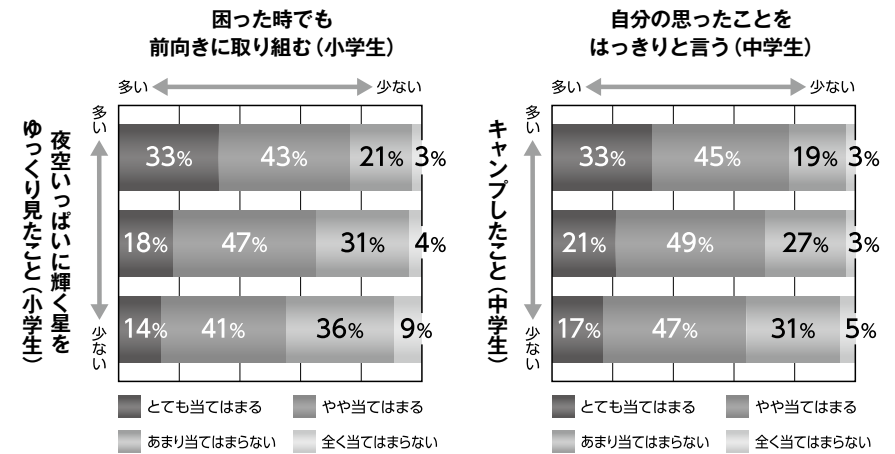
子どもの頃に体験が豊富な大人ほど、その子どもも体験が豊富な傾向にあり、また、自己肯定感が高い大人ほど、その子どもも自己肯定感が高い傾向にあるなど、大人の体験や意識は子どもに大きな影響をあたえています。



出典：「青少年の体験活動と自立に関する実態調査」(2010年度)

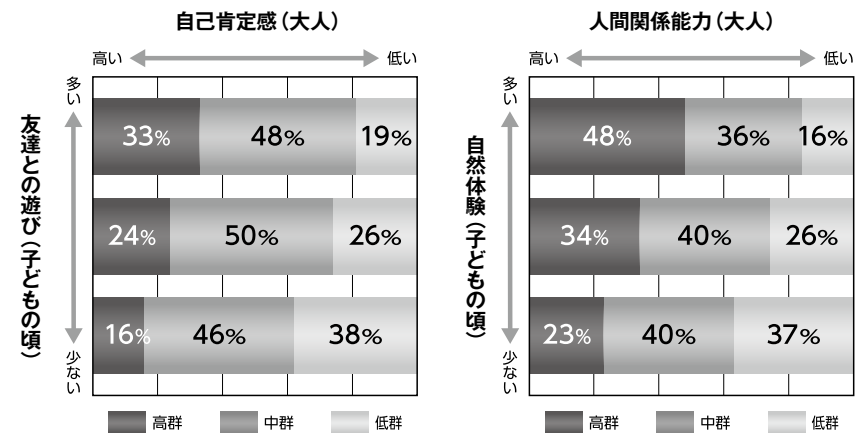
国立青少年教育振興機構では、子どもの体験活動に関する様々な調査を行っています。

外遊びが多い小学生や中学生ほど  
規範意識やチャレンジする力が高い傾向にあります。



出典：「青少年の体験活動に関する実態調査」(2014年度)

子どもの頃に友達との遊びや自然体験が多かった大人ほど、  
資質や能力が高い傾向にあります。



出典：「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」(2010年度)

# 大人の皆さまにお伝えしたいこと

この本は、私たちの暮らしを支えている森、里、川、海、と、人とのつながりを大切にしていこう、というプロジェクトから生まれました。プロジェクトが提案する取組の一つ「森里川海で元気に遊ぶ子どもをよみがえらせる」ことを目的に、子どもたちが自然の面白さに気づき、自然体験に関心を持つきっかけとなる本を作ることになりました。

子どもたちに伝えるためにはどうしたら良いか、八人の編集委員と環境省と一緒に考え、教えるのではなく感じてもらう読み物とすることになりました。中心となる物語の執筆は、自然とのふれあいの中で成長していく子どもたちの姿を生き生きと描いている作品が印象的な、児童文学作家の阿部夏丸さんにお願しました。

今の時代、子どもたちも大変です。物語の主人公ヒロキのクラスメイトが言うように、「塾があるし、スイミングはあるし、そんなにひまじゃあない」のです。でも、せわしない都会のご真ん中でも、過疎化が進んだ地方で

ることができません。

そもそも子どもたちには、発見する力やいろいろな困難を乗り越える力が一人一人に備わっていると思います。それを発揮する場がないと、この力がいつの間にか衰え、なくなっていくのではないのでしょうか。よちよち歩きの間から、一歩、また一歩と外界へ踏み出していく中で、少し怖い思いをしたり、達成感を味わう経験を経て、もう少し高度な冒険に挑む力がついていきます。そうやって子どもを成長させる仕掛けと魅力は「自然」はたくさん備えています。物語の中のヒロキとユウヤは、現実で考えるとかなり無茶な冒険をしています。ため池が「立ち入り禁止」になっていたのは、安全面からの配慮だったのでしょうか。もちろん、ルールを破ること自体は決して推奨されるべきことではありません。ただ、自然の中で遊ぶ子どもたちに対しては、その行動を必要以上に制限するよりは、五感で感じる体験や冒険の中から、危険を察知し安全を確保する技術や能力を、自ら身につけるよう促すことも大切ではないでしょうか。

もし、子どもたちがこの本を読んで、自然に興味を持ってくれたら、大人のみなさんも一緒に自然の中へ出

も、私たちのすぐそばに自然はあります。そしてそれらは、飛行機を使ってわざわざ遠くに行かなくても、その気になればふれあえる、すぐ足もとにある、ということに気づいてもらいたいです。ヒロキと不登校の友人ユウヤは、家の隣のため池で、彼らが今まで気づかなかった発見をしました。何もないと思いついていたため池は、実は「生き物の宝庫」でした。そういう場所が、日本にはまだまだたくさん残されていると思います。

私たちの暮らしはあまりにも便利になりすぎて、いくらでも欲張りに詰め込むことができるようになってしまいました。そして、合理性ばかりを追い求め、一見無駄と思えることを極度に避けようとしてしまいます。しかし、最近、学校教育でもよく言われる「生きる力」とは、いろいろな試行錯誤から、ようやく自分で見つけ出すことにより真に身についてゆくものであると思います。攻略本に頼って進むだけでは決して身につかないものですし、そんな過程では、驚きも喜びも半減したものしか得

て、自然とのふれあいを楽しんでいたかと思えます。子どもたちの生き生きとした姿と鋭い観察の目に、改めて驚かれるに違いありません。あるいは、そのような冒険を遠くから見守り、そっと支えることが、「森里川海」で輝く笑顔を増やしていくことにつながります。

この本が、子どもにとっても大人にとっても、自然とつながるきっかけになってくれたら、これほどうれしいことはありません。  
(千田 純子<sup>ちだ じゅんこ</sup>)

## 「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクト

森里川海の恵みを将来にわたって享受し、安全で安心な国づくりを行うため、環境省と有識者からなるプロジェクトチームが中心となって「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトを立ち上げました。二〇一六年九月には「森里川海をつなげ、支えていくために（提言）」を公表し、この提言に基づく取組の一つが、森里川海の恵みや自然体験の大切さを子どもや大人に伝える読本である『森里川海大好き！』の制作です。

プロジェクトHPはこちら

<http://www.env.go.jp/nature/morisatokawaumi/>



# 『森里川海大好き!』

編集委員会

## 養老孟司 委員長

一九三七年、鎌倉市生まれ。解剖学者。東京大学名誉教授。『バカの壁』（新潮社）をはじめ、人の心や社会現象を脳科学、解剖学の視点から解き明かした多数の著書をもつ。NPO法人「日本に健全な森をつくり直す委員会」委員長。本書ではまえがきとして「自然に親しむ」を執筆。

## 天野礼子 委員

京都市出身。物書き。中・高・大学を同志社で過ごす。一九才より年間一〇〇日、国内外の川・湖・海を釣り歩く。「カナダではサケが森をつくっていた」ことを我が国に紹介した。NPO法人「日本に健全な森をつくり直す委員会」事務局長。本書では「日本にはたくさん川の川がある」を執筆。

## 田中 克 委員

一九四三年、滋賀県生まれ。京都大学名誉教授、舞根森里海研究所長。水産生物学・森里海連環学。著書に「森里海連環学への道」「いのちのふるさと海と生きる」など。三陸沿岸、琵琶湖、有明海の水辺の再生と森里海連環学の深化と普及に携わる。本書では「陸に上がった魚は、今」を執筆。

## 辻 英之 委員

一九七〇年、福井県生まれ。グリーンウッド自然体験教育センター代表理事、立教大学講師。長野県泰阜村を「教育立村」化に向けて奔走。『奇跡のむらの物語——一〇〇〇人の子どもが限界集落を救う——』農文協出版。本書では「伝説の巨人「ダイダラボッチ」と里山の子どもの暮らして」を執筆。

## 山本裕一 委員

一九五六年、東京都生まれ。一九八〇年、国立社会教育研修所に入所以来、文部省（文部科学省）、東海市教育委員会などで主として社会教育行政に関する業務を行う。二〇一六年六月から独立行政法人国立青少年教育振興機構国立中央青少年交流の家所長。本書では「かわい子には体験を」を執筆。

## 内山 節 委員

一九五〇年、東京都生まれ。哲学者。東京と群馬県の山村、上野村との二重生活を半世紀近く続けている。主著に『内山節著作集』（全15巻、農文協）などがある。NPO法人「森つくりフォーラム」代表理事を務める。

## 小林朋道 委員

Twitter@Tomochikobaya

一九五八年生まれ。公立鳥取環境大学教授、環境学部長。ヒトや絶滅危惧種の行動を研究し保全にも取り組む。著書は『先生、モモンガの風呂に入って下さい!』（築地書館）他多数。本書では「健康な「森と里と川と海」は、そしてそれらのつながりは、なぜ私たちにとって大切なのか?」「自然体験は、どうして子どもに必要なのか?」を執筆。

## 竹内典之 委員

一九四四年、京都市生まれ。京都大学名誉教授。京都大学の各地の演習林に勤務、明るく豊かな森づくりを提唱してきた。二〇〇三年には「森里海連環学」の創成をめざし京都大学フィールド科学研究センターの設立に携わる。本書では「日本は森林（もり）の国」を執筆。

## 物語 阿部夏丸

一九六〇年、愛知県生まれ。『泣けない魚たち』（講談社）で第一回坪田譲治文学賞、第六回椋鳩十児童文学賞を受賞。「オタマジャクシのうんどうかい」で第二回ひろすけ童話賞を受賞する。子どもたちの冒険や魚釣りなど自然体験をテーマにした作品を多数もつ。本書では「大発見は足もとに」を執筆。

## 環境省「森里川海プロジェクトチーム」からの執筆者

### 奥田直久 自然環境局自然環境計画課課長

一九八六年に環境庁入庁。中部山岳国立公園上高地地区、自然ふれあい推進室、野生生物課、在ケニア日本大使館、那覇自然環境事務所等で勤務。二〇一六年七月から現職。世界自然遺産やサンゴ礁、里山の保全などに取り組んでいる。本書では「ワナギとザリガニが教えてくれること」を執筆。

### 千田純子 自然環境局総務課課長補佐

一九九六年に環境庁入庁。富士箱根伊豆国立公園箱根地域を担当をふりだしに、国立公園課、野生生物課、新潟支所、新宿御苑管理事務所など、入庁以来自然環境局一筋で勤務。二〇一七年四月から現職。本書では「大人の皆さまにお伝えしたいこと」を執筆。



## 森里川海大好き！

発行 2018年 3月21日 初版発行  
2019年 7月 8日 初版第5刷発行  
編著者 『森里川海大好き！』編集委員会（委員長・養老孟司）  
発行所 環境省「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトチーム  
〒100-8975 東京都千代田区霞が関1-2-2  
環境省 自然環境局 自然環境計画課  
電話 03-3581-3351（代表）

©環境省「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトチーム 2018 Printed in Japan

ISBN 978-4-9910599-0-2

表紙・本扉・奥付 イラスト

tarout「つなげよう、支えよう森里川海アンバサダー」

編集 公益社団法人 日本環境教育フォーラム

制作 株式会社ジオングラフィック

印刷製本 株式会社サンエー印刷



この印刷物は環境に配慮した  
「ライスインキ」を使用しています。